

聖徒の道

1974年6月20日発行（毎月1回隔日発行） 第18巻 6号
郵便番号 104 東京都千代田区千代田 1-1-1

聖徒の道
6 1974

聖徒の道

1974 6月号

も く じ

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプラー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアズ
(内務伝達部長)
ジョン・E・カー
(配送翻訳部長)
ドイル・L・グリーン
(教会誌編集主幹)
ダニエル・H・ラドロウ
(教会教課企画調整主任)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼 修一

ローカル編集

高木 まりゑ

天の第一の律法 — 従順……………S・デルワース・ヤング

偉大な人物—ジョセフ・スミス

その驚くべき示現の数々……………243……………ジェリー・C・ラウンディー

発見された事実……………249

ノーブーのミイラ……………252……………W・ラルフ・オドム

「逸話集、近代の使徒の生涯より」……………254……………レオン・R・ハートション

— ジェデダイア・M・グラント —

— オルソン・プラット —

— ジョージ・A・スミス —

うるわしき朝よ……………261……………マーガレット・C・リチャーズ

キャロル・C・マドセン

小さなお友だちへ……………262

百分の一の祝福……………264

最初のじゅんきょう者……………266

おもちゃばこ……………268

夢……………269……………シプアウ・J・マトゥアウト

自分が何者かを知り、自尊心を持つ……………271……………ハロルド・B・リー

最も大いなる誉れ／女性の役割……………277……………N・エルドン・タナー

報い、祝福、約束……………282……………スペンサー・W・キンボール

ローカル・ニュース……………286

聖徒の道 6月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-8-10

配 送 東京ディストリビューション・センター

東京都港区南麻布5-10-25

定 価 年間予約 1,300円 1部 130円

海外予約 1,800円



天の第一の律法 従 順

七十人最高評議員会

S・デルワース・ヤング

かなり前のことだが、チャールズ・W・ペンローズ副管長がソルトレークシティのリチャーズワード部の聖餐会に出席したことがあった。会の始まる直前、ペンローズ長老は監督と共に通路を通過して説教壇に向かった。するとなかほどで長老は立ち止まり、監督に向かってこう尋ねた。「だれがあの標語を張ったのですか。」その標語とは、説教壇の正面に張られたポスターのことであった。

そこには、「秩序は天の第一の律法である」と書かれていた。

監督はだれが張ったか知らなかったが、補助組織のだれかに違いないと思った。その場はそれきりで、ふたりは通路を進み、やがて定刻通りに集会が

始まった。

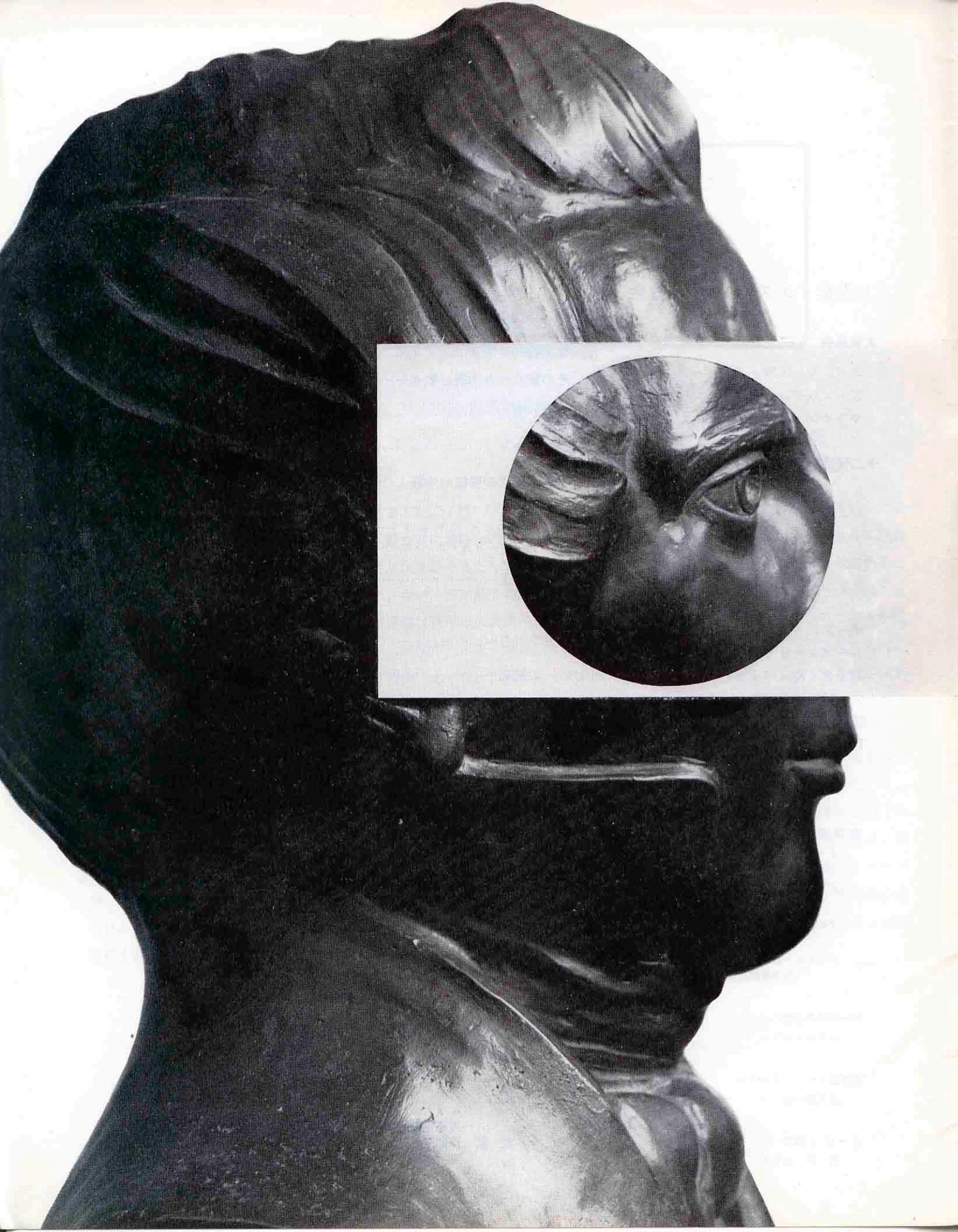
教会堂に着いたとき、ペンローズ長老が何を話そうとしていたかは知らない。だが、彼が話を始めたとき、最初の言葉は秩序は天の第一の律法ではない、従順が天の第一の律法であるという言葉であった。彼は45分を費やして理路整然と事例や聖句を引き、そのことを証拠だてた。当時まだ少年であった私は、従順によって秩序がつくられる、従順がなければ秩序はなく、あるのは混乱のみであるという話に強い印象を受けた。

私たちは皆、主なる神の持ちたもう目的について、アブラハムに与えられた啓示をよく知っている。

「これらの者の中に、神の如き者一

人立ちて共に在りし者たちに言いけるは、われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」(アブラハム 3 : 24, 25)

主に従うには主のしもべに従わねばならないことを私たちは知っている。どの管理役員にも、私たちが管理下であればその指示に従うべきである。私たちが大管長、ステーキ部長、ワード部の監督、定員会会長に、おのおのの職の管理下にあつて従うべきことは明らかである。



1820年の春のこと

ひとりの少年がひざまずいて祈っていた。するとそこに、父なる神と御子があらわれたもうた。

御二方は少年ジョセフに言われた。

「私の教会を回復するために、私があなたを選んだ」と。

ジョセフは主の予言者。
天が開け、福音が回復された。
何とすばらしいことだろう。

今から150年も昔、ニューヨーク州バルマイラで、ジョセフ・スミスという少年が森に入って祈りました。ジョセフは、どの教会がほんとうの教会なのか、それを知りたいと思いました。

ジョセフの祈りは、すばらしいその朝に、

ふしぎな方法で答えられました。天のお父さまと御子イエス・キリストがジョセフの前にあらわれたのです。

ジョセフ・スミスの最初の示現について、次の中から正しいものを選びましょう。

1. ジョセフ・スミスが祈ったのは、

- イ. 1830年の秋
 - ロ. 1820年の春
 - ハ. 1847年の冬
- でした。

2. そのときジョセフは

- イ. 10さい
 - ロ. 18さい
 - ハ. 14さい
- でした。

3. ジョセフは聖書の

- イ. ヤコブ書
- ロ. マタイ伝
- ハ. ヨハネ伝

を読んでいました。

4. そこには

- イ. 求めよ、そうすれば見いだすであろう。
- ロ. 門をたたけ、そうすればあけてもらえるであろう。
- ハ. あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人はとがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。

と書いてありました。

5. ジョセフは、

- イ. 教会に行くべきかどうか
 - ロ. どの教会に行ったらいいか
 - ハ. なぜ教会に行くべきか
- を知りたかったのです。

6. 救い主はジョセフにごう言われました。

- イ. お母さんが行っている教会に行きなさい
- ロ. どの教会も正しくない
- ハ. 教会などには行かないほうがよい

7. そしてジョセフは

- イ. 末日聖徒イエス・キリスト教会の最初の予言者
- ロ. 主の忠実なしもへ
- ハ. 人々の立派な指導者になりました。



うるわしき
朝。



イ(1) ロ(9) ロ(9)
イ(7) ロ(8) イ(1) ロ(1): 222

マーガレット・G・リチャーズ
キャロル・C・マドセン
絵: ハワード・オクス

偉大な人物—ジョセフ・スミス

その驚くべき示現の数々

ジェリー・C・ラウンディー
さし絵 ニナ・グローバー

ジョセフ・スミスを知るには、彼の霊的な特徴と外観上の特徴を知らねばならない。予言者と親交のあったパーレー・P・プラットは、こう描写している。

「ジョセフ・スミス大管長は背が高く、堂々としており、活発、頑健である。肌は白く、髪は明るい。碧眼でひげは薄く、彼特有の表情を持ち、目は生来興味ある視線をたたえ、物を見つめて飽きることがない。表情は常に穏やかで、話しやすく、知性と慈愛に満ちあふれている。また生き生きとしていて、自然に笑みがこぼれるように見える。いつも元気そうで、顔をしかめたり、自分を抑える風がまるでない。静かで落ち着いた眼差しの中にも、人の心の奥底を見通し、永遠を見つめ、天を貫き、全世界を見抜くような何かがあった。

彼は高潔、大胆で自主独立の性格を持ち、打ちとけた親しみやすい態度だが、叱責は獅子のごとく恐ろしく、慈悲は海のごとく深かった。万事にわたる知恵と雄弁のほとぼしる言葉は、学びもせず訓練も受けず得たものである。教育によって磨き上げられたり、技巧によって洗練されたりしたものではないが、生まれながらの素朴な調子で口から流れるのであった。言い方といい、話すことといい、実に種々様々で豊かであった。彼は人々に関心を持たせて教えながら、同時に楽しませた。彼の説教は聞いていて飽きる人が

いなかった。寒い霧の中や日射しの中、雨の中、風の中を、あるときは笑わせ、そうかと思うと次には泣かせ、何時間も聞く人々の心を捕え、気をそらさずに話を続けるのであった。そういう彼を私は知っている。彼を激しく憎む敵ですら、いったん耳を傾けさえすれば、たいていは説き伏せられるのであった。

つまり、彼にはダニエルとクロスが上手に混ぜ合わせたような性格があった。ダニエルの持つ賜と知恵、献身が、クロスの大胆さと勇氣、節制、忍耐、寛大に結びついていた。もし彼が円熟の年齢まで殉教の運命を免れていたならば、豊かな力と才能に恵まれて、多くの点で世を改革し、歴史になかったようなすばらしい働きで後世に名を残していたであろう。」(The Historical Record「歴史記録」第7巻、〔1888年1月〕、〔英文〕P. 575-56)

アダムは、キリスト教会の地上で最初の教会員であり、神の御子の神権を持つ最初の大祭司であった。アダムは神から委任を受けたが、その中でも、神の救いの計画を、末日の世に至るあらゆる神の子供たちに及ぼす鍵を与えられた。キリストの福音に関わる啓示が人に与えられるのは、過去にも将来にもアダムのその権能を通してである。予言者ジョセフは言った。

「アダムは時満ちたる神権時代の諸々の鍵を握っている。すなわち世の初めからキリストの時代に至るまで、ま

たキリストの時代から、世の終りに至るあらゆる神権時代が彼を通して啓示されたし、また今後もそうであろう。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith「予言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P. 167, 68)

ジョセフ・スミスはさらに、福音の原則や教えが地上の人間に啓示されるときは、必ず天からアダムの権能を通してもたらされるのであると述べている。(同上)

この原則の意味するところは、神権の鍵が天から啓示されるときは、必ずアダムの指示下において行なわれるということである。バプテスマのヨハネがアロン神権を回復したとき、彼はペテロ、ヤコブ、ヨハネの指示によって行動した。しかしペテロ、ヤコブ、ヨハネはアダムの指示によって働いたのである。教義と聖約の128章は福音の回復の要約であり、予言者はここに幾つかの出来事を列挙している。20節にこう書いてある。

「また、われら何をか聞く。クモラよりの喜ばしき音信なり。そは予言者らの予言の成就、すなわち顕るべき書を宣する天降れる天使モロナイなり。かの書の証をなすべき三人の見証者を宣言したもうセネカ郡フエイヤットの荒野に於ける主の御声、光明の天使となりて現われたる悪魔を発きしサスケハナ河岸に於けるミカエルの声、王国の鍵と時満ちたる神権の時代の鍵を有つと自ら宣言せる、サスケハナ郡ハー

偉大な人物—ジョセフ・スミス
その驚くべき示現の数々

モニーとブルーム郡コーレスヴィルの間なる荒野の中サスケハナ河のほとりに於けるペテロ、ヤコブとヨハネの声。」

ここには、ミカエルが神の計画を阻止しようとする悪魔を退散させたことが記されている。このミカエルこそ、予言者ジョセフ・スミスが告げたアダムである。ペテロ、ヤコブ、ヨハネがやってきてメルケゼデク神権を回復したときにもアダムはそこにいた。

アダムは福音の計画の先頭に立ち、福音の諸神権時代を管理する。また、キリストが栄光の雲に乗り全人類の眼前に現われたもう日の前に、アダム・オンダイ・アーマンで開かれる大会議の議長となる。そこで、人類の諸事に関ったおのおのの予言者が父祖アダムに報告をし、それからアダムが代表して救い主に報告する。ジョセフ・スミ

たからである。

ジョセフ・スミスはこの重要な召しに予任されていた。自分でも、この予任をある程度知っていた。というのはあるときこのように言っているからである。「兄弟たち、私はあなたがたに自分が何者であるかを告げられたらと思う。私の知っていることを話せたらよいのと思う。しかし、あなたがたはそれを冒瀆だと言うであろう。またこの場には私の命を取ろうとする者たちがいる。」(オルソン・F・ホイットニー、*Life of Heber C. Kimball*「ヒーバー・C・キンボールの生涯」〔英文〕P. 322)

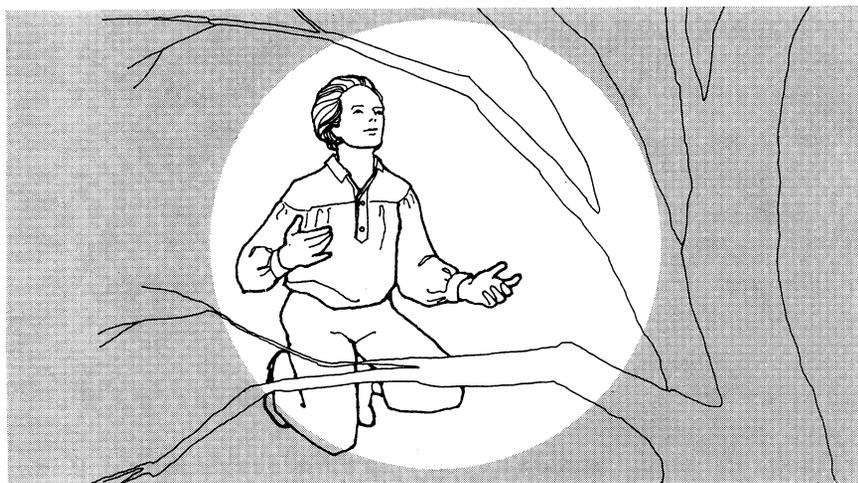
この少年は14歳の年で大きな信仰を示した。それは、聖典の中でも最大の示現を見る特権にあずかれるほどに大きな信仰であった。この青年は、古代

子を紹介されるというこの上ない特権を得た。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はこのことに触れて、こう述べている。

「墮落以来の啓示はすべて、旧約聖書のエホバであるイエス・キリストによって与えられている。どの聖句でも神と記されている所や神が現われたもう場面では、その神はアブラハムと語り、ノア、エノク、モーセその他のすべての予言者と語りたもうたエホバであった。……御父は、墮落以後、人に直接、個人的に働きかけられたことはないし、御子を紹介したり証したりする以外に姿を現わされたこともない。」(*Doctrines of Salvation*「救いの教義」第1巻〔英文〕P. 27)

しかしながらこの見神は、38年の短い一生のうちにジョセフが数々受けた幕の彼方からの訪れのほんの始まりであった。天父と御子の訪れを受けて4年後、昔アメリカ大陸に住んでいた古代の予言者がジョセフに現われ、天使モロナイと名乗った。その後1829年5月15日に、古代の予言者バプテスマのヨハネがジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに現われて、アロン神権を授け、それから1カ月の内に、古代のキリストの使徒ペテロ、ヤコブ、ヨハネが現われてふたりにメルケゼデク神権を授けた。このときそこにアダムがいて、神権の授与を阻もうとした悪魔を防御したのである。

カートランド神殿が完成して献納されてからは、主が降って福音に関する他の鍵を回復される場所が備えられた。1836年4月3日、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは、神殿を受け入れたもうたキリストの訪れを受けた。その後3人の古代の予言者が現わ



スは、アダムから彼の時代に至るすべての予言者の保有した鍵をすべて預かる予言者である。なぜならば、彼は選ばれて、時満ちたる神権の時代を導い

の予言者と語ったかの偉大なエホバの姿を見るという特権にあずかったばかりか、エロヒムとして知られる御父が天降り、^{おして}面をあわせて語りたまひ、御

れて、福音に必要な諸々の鍵をふたりに授けた。ジョセフ・フィールディング・スミスによれば、ノアであるという偉大な予言者エライヤス（「福音の質疑応答」第3巻P.138, [英文]）が現われて、ふたりの頭にアブラハムの神権時代の鍵、言い換えれば、ブルース・R・マッコンキー長老が（*Mormon Doctrine* 「モルモンの教義」 [英文] P.219）の中で述べているように、日の光栄の結婚と多妻結婚の鍵を授けたのである。こうして再び、夫と妻が永遠に結ばれるという約束が地上に回復された。

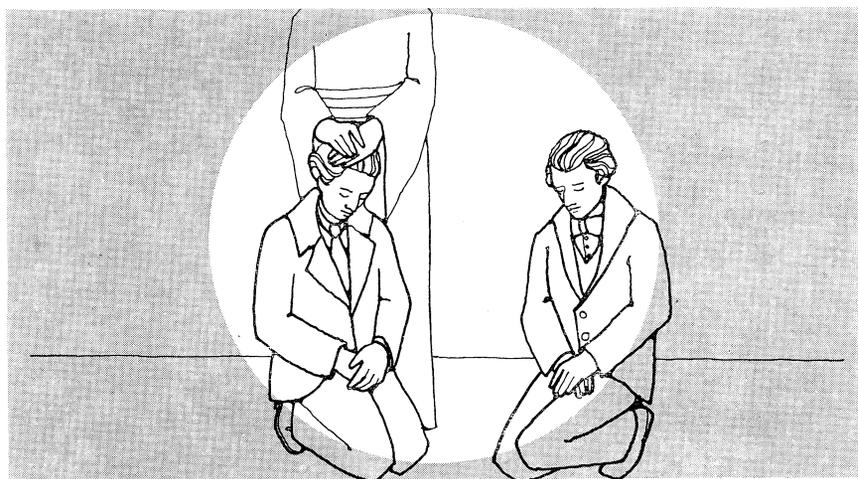
この示現が閉じられると、次にイスラエルの民をとらわれの身から導き出した偉大な予言者モーセが現われ、ジョセフとオリバーの頭にイスラエルの集合と北の地から10支族を導き来たるための鍵を授けた。こうしてジョセフは、宣教師を世界中に遣わし、末日の主の選民を集める業を開始する権能を持つこととなった。

モーセが去ってすぐ、火の車で天にあげられた予言者エライジャ（エリヤ）が現われ、妻を夫に、夫を妻に、子供を親に結んで、全人類が父祖アダムに結ばれる結び固めの権能をふたりに授けた。エライヤスは日の光栄の結婚の鍵を授けたが、その結婚や他の福音の儀式のすべてを結び固める鍵はエライジャが授けたのである。この鍵は、死者のための働きを開始する権能をも含んでいた。この権能を受けたジョセフは、今や幕の彼方を見、福音を聞く機会を持たずに世を去った愛する先祖に、救いの扉を開く代理の儀式が執行できるようになったのである。

さて、今あなたは、ジョセフ・スミ

スの使命の重みがわかり始めたであろうか。どの予言者も福音の鍵の幾つかを握るにすぎなかった。ところが彼は、かつて地上に存在したすべての鍵を受

いんだ」と言ったのである。（*Juvenile Instructor*. 「ジュブニール・インストラクター」第27巻 [1892年5月15日] [英文] P.303, 4）



けたのである。

ジョセフ・スミスはこのときまでに、まるで日常茶飯事のように幕の彼方を見るようになっていた。彼とシドニー・リグドンがオハイオ州ハイラムのジョンソン兄弟の家で、教義と聖約76章として知られる啓示を受けたとき、ジョセフは主のみたまの導きをよく経験していたので、モーセが神と語ったとき（モーセ1：9, 10）や、ジョセフ自身が御父と御子にまみえたあとのように、極度の疲労で地に倒れるということとはなかった。この啓示を受けたとき、ジョセフはちょっとしたユーモアを示したのである。示現が閉じられると、シドニーは精魂尽き果てて、寝椅子に横たわらなければならない有様であった。そのシドニーの青ざめた顔を見て、ジョセフは笑みを浮かべながら、「シドニー兄弟は私ほど慣れてはいな

モロナイが初めてジョセフ・スミスに現われたのは、1823年9月21日のことであった。それは、4年にわたって少年ジョセフを無学な農家の少年から、天使に指導を受けた神の予言者に変えるための、モロナイを教師とする徹底した教育の第一歩であった。この青年予言者が正規の学業をほんのわずかしか受けていないのは事実である。しかし彼は無学ではなかった。4年も費やして永遠の大学に学び、神の玉座から遣わされた学者に教えを受けたのである。

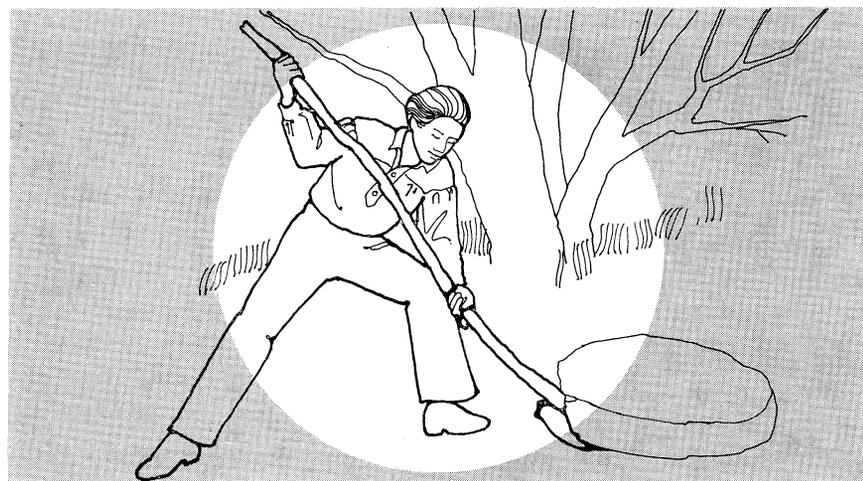
モロナイがジョセフに現われた最初の夜に、繰り返し学ぶという学習の原則が重要であることが如実に示された。天使は3回現われ、ひと晩かかって、ジョセフに金版とモルモン経について必要なことを教えた。そして翌日父といっしょに畑で働いていたジョセ

偉大な人物—ジョセフ・スミス
その驚くべき示現の数々

フに天使は再び現われ、クモラの丘へ行くように告げた。ジョセフはクモラの丘でモロナイと会い、取り出すことは禁じられたが、その金版を見せてもらうことができた。この4回に及ぶ訪問の間、天使はジョセフと同じことを繰り返し教えたのである。

4年間の準備の時期に、ジョセフはモロナイだけでなく、他の天使からも教えを受けた。ジョージ・Q・キャンロンは、ジョセフが絶えず天使たちの訪れを受けていたと語っている。ジョン・ウェントワースへの手紙の中で、予言者はこのように言っている。「1827

出してすぐにも家へ持ち帰ることができると思った。これだけの金があれば何ができるだろうか、とさえ心に思っていた。しかし、主は人の弱さを承知しておられ、忠実であつたらどうなるか、逆につまずいたときはどういう結果になるかを示して、青年予言者を鍛えよとされた。オリバー・カウドリは、ジョセフが天使から教えを受けていた間に、次のようなことが起こったと記している。「…諸々の天が開けて主のみ栄えがあたり輝き、ジョセフの上に留まった。彼がそうして賛美し、目を凝らして立っていると、天使が『見



年9月22日の朝、神の天使たちから何回も訪問も受けて、末日に起きる厳かな栄えある出来事を明かされた後、主の天使は私にその記録を手渡した。」(Documentary History of the Church「教会歴史記録」第4巻〔英文〕P. 537)

ジョセフは初めてクモラの丘に行き金版を見せられたときに、金版を取り

よ』と言った。そう言っている間に、おびたしい仲間に取り巻かれた暗闇の君が見えた。これらは皆、彼の眼前で起きた。すると天の使いが言った。『すべてが示された。良きも悪しきも聖なるものも汚れたものも、神の栄光も闇の力も。これより後、汝はふたつの力を知るであろう。決してかの悪魔の力に影響を受けたり、敗北を喫したりしてはならない』と。」(Messenger

and Advocate「メッセンジャー・アンド・アドボケート」第2巻No.1〔1835年10月〕、〔英文〕P. 198)

もうひとつ、人々にあまり知られていないが、1年後の1824年9月の同日その同じ場所にモロナイが現われていることを取り上げよう。このとき、ジョセフは18歳だったはずである。ジョセフはこの来訪についてあまり語っていないが、予言者の母が息子の伝記を書いた中に、この訪問の詳細について興味あることを記録している。母親によれば、予言者は金版を持ち帰るつもりでクモラの丘に行った。実際に掘り出す許可を受けたと書いている。ジョセフは、金版を受け取る条件は神の戒めを守ることだけだと思っていた。そしてそれは自分にできると思った。しかしその条件の中には、金版を安全な場所にしまうまでは、下に置いたり手から離したりしてはならないという命令が含まれていた。ところがジョセフは金版を取り出して家に帰る途中、もしや何かを置き忘れてはいないかと、引き返して中を調べ、箱にふたをして来ようと思ったのであろう。金版を地面に置いて、丘に戻った。そして再び引き返してみると、金版がなくなっていた。何か貴重な物をなくしたことのある人ならば、このときの青年のあわておびえた気持がよくわかるであろう。彼は驚き、心配して祈り始めた。するとそのとき天使が現われ、指示を守らなかったジョセフを叱責した。ジョセフがその後再び許しを得て、隠し場所を覆った石を取り退けると、中にあの金版があった。ジョセフはこのときも、丘から金版を持ち出すことができるとまだ考えていた。母親の言葉によれば、「ジョセフはさうそく金版を

取り出そうと手を差し伸べたが、手が届くと思いきや、強烈な力で地面に打ち倒されてしまった。気を取り戻したときには、天使は去ってしまっていた。ジョセフは起き上がって、失意と悲しみに泣きながら家へ帰った。」「ルーシー・マック・スミス *History of Joseph Smith by His Mother* 「母親が語るジョセフ・スミスの生涯」〔英文〕P. 84)

あるとき青年ジョセフは、父親のジョセフ・スミス・シニアの使いで、家から少し離れたマンチェスターに出かけた。帰りが遅くなったので、父親はジョセフにその訳を尋ねた。すると青年予言者は、「今まで経験しなかったような厳しい懲らしめを受けたんです」と返事した。父親が、だれに権利があってお前にとがめだてをするのかと問いつめようとする、ジョセフは答えた。「待つて下さい、お父さん、待つて下さい。主の天使だったんです。金版のあるクモラの丘の脇を通ったとき、天使に会いました。そしてその方から、主の御業に全力を打ち込んでいない、記録を取り出すときがすでに来ている今、もっと本気で一生懸命神様に命じられたことをしなくてはならないと言われたのです。」(同上、P. 99—101)

この4年間のモロナイその他の古代の予言者の来訪は、青年予言者を教え、使命に対して準備をさせるためであった。1827年がやって来るまでにジョセフは充分教えを受け、訓練されて、金版を預かり、翻訳に従事できるまでになっていた。

ジョセフ・スミスの準備を手伝うために、幾人もの天界の人物が現われた。それは御父と御子であり、モロナイであり、バプテスマのヨハネであり、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、モーセ、エラ

イヤス(ノア)、ラファエル(だれであるかはっきりしない)、ミカエル(アダム)、エライジャであった。ジョン・テイラーは、ジョセフ・スミスは主だけでなく、「……古代の使徒や予言者とも交わった。たとえばアブラハム、イサク、ノア、アダム、セツ、エノク、そしてイエスと御父、またアジア大陸に住んだ使徒はもちろんアメリカ大陸に住んだ使徒たちともである」と言っている。(Journal of Discourses「説教集」第21巻〔英文〕P. 94)



ジョセフ・スミスはウェントワース書簡の中で、1827年9月22日朝に金版を受け取るに先だて、神の天使から数多くの訪れを受けたと述べており、ジョン・テイラーはさらに、ジョセフ・スミスが神の予言者として立てられたとき、「モルモン、モロナイ、ニーファイその他の、以前このアメリカ大陸に住んでいた古代の予言者」がジョセフを訪れ、福音の原則を伝えたと述べている。(「説教集」第21巻〔英文〕P. 374)

予言者の母親は自筆の本の中で、家族は夜の仕事もそこそこに台所のテーブルを囲んで、ジョセフの語る古代ニーファイ人とレーマン人の話に耳を傾けたと記している。話は生き生きと、歴史や文化、宗教の詳細に至るまで、まるで予言者が古代の民の中で生活してきたかのように語られたという。ジョセフはニーファイ人とレーマン人の歴史の一部始終をパノラマのように見たに違いない。

ジョセフは、訪問を受けたことを立証するように、使徒パウロを見事に描写している。(「予言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P. 347) またあるとき、彼は兄のアルビンがアダムとセツに非常によく似ていると、述べたことがある。(「教会歴史記録」第5巻〔英文〕P. 347)

ジョセフと予言者たちの間に接触があったことは、1834年のひとつの出来事からも裏付けられる。予言者ジョセフは、暴徒に奪われた土地や家の返還

要求をする聖徒たちを支援しに、シオンの陣営を率いてミズーリへ向かっていた。ある日、隊の先陣をつとめていたジョセフは、見知らぬ人と話をしている様子だった。彼が隊に戻って来ると、だれと話をしていたのかと質問が出た。ジョセフは、今は黙示者ヨハネで、失われた10支族を訪ねて行く途中なのだと言った。(Diary of Oliver Boardman Huntington 「オリバー・ボードマン・ハンチントンの日記」BYU図書館所蔵タイプ冊子1847—1900第2部〔英文〕P.162)

予言者ジョセフ・スミスは全身全霊

いと申し出、マードック兄弟はそれを承知した。

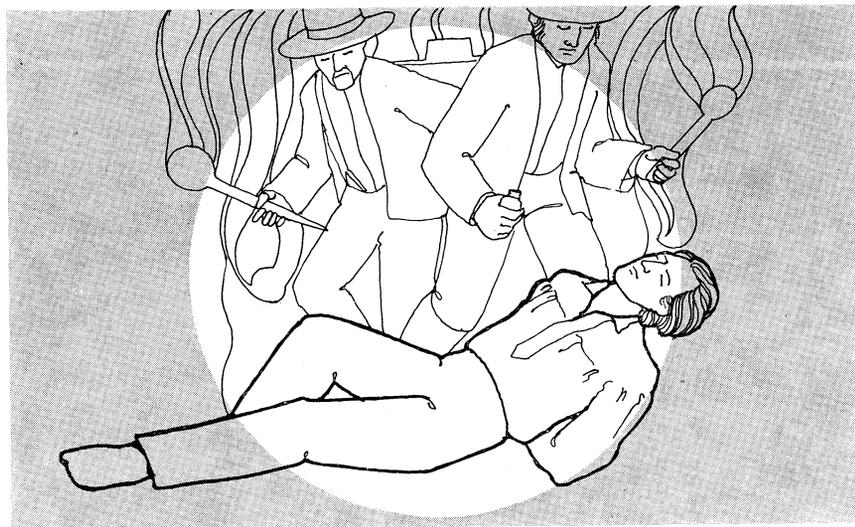
この双子は11カ月を迎えたとき、ハシカで重態になり、スミス家は幾晩も眠られぬ夜を過ごした。そのようなある晩、予言者は妻に自分が居間で重い方の子供を看るから、奥の寝室で少し休むように言った。夜がふけていき、ジョセフは車付きの寝台に横になってうたた寝を始めた。そして気がつくとうたた寝を始めた。そして気がつくとき、怒り狂った暴徒にかつがれて正面のドアを出て行く所だった。暴徒たちは口々に叫んでいた。「足を床につけさせ

のである。

暴徒は一休みした後で、予言者を殺すかどうか相談していたが、やめようということになった。するとひとり、「口にタールを塗り込もう」と言った。そのひと声を聞くや、暴徒たちはわっとばかりにジョセフの口にタールを流し込もうとし、次には歯の間から毒薬の小びんを押し込んで、毒を含ませようとした。しかし、ジョセフは歯を食いしばってこらえたので、びんは割れ、前歯の1本が欠けた。口にタールを塗り込むのにも、毒を飲ませるのにも失敗した暴徒たちであったが、その中のひとりがジョセフの上に馬乗りになった。そして他の暴徒がジョセフの服をカラーだけを残してポロポロに引き裂いた。次いで馬乗りになった男は「……聖霊はこうして人間をやっつけるんだ」とぶつぶつ言いながら、気の狂った猫のようにジョセフを引っかき始めた。彼らはそれから熱いタールをジョセフに注いで羽ぶとんに巻き込み、死なせるつもりで放置した。

予言者は意識を取り戻してから、家に向かった。妻のエマは、ジョセフが体一面にタールと羽をくっつけて帰って来るのを見て、気絶した。その夜はジョセフの体のタールはがしに終始することとなった。医者であり、予言者の副管長でもあったフレデリック・G・ウィリアムズが、この心を痛める辛い仕事に携わった。時々タールと共に皮膚が大きくはぎ取られた。翌日は安息日で、予言者は苦痛をおして礼拝に出席し、説教を行なった。

ジョセフ・スミスの生涯を研究すると、彼がいつでも、どんな犠牲を払っても、主に完全に仕えたことを必ず思い起こすことであろう。・



をもって主に仕え、いつでも、どんな代価を払っても、どんな危険を冒しても、喜んで主に奉仕した。彼は悪条件の下でも進んで主に仕えた。オハイオ州ハイラムのジョンソン家に住んでいた間に、妻のエマは双子を生んだが、どちらもその日の内に死んでしまった。同じ日に、ジョン・マードックの妻も双子を生んだが、その子らを残して分娩中に死亡した。ジョセフとエマはマードック兄弟に双子を養子にした

るな！みんな張り倒されるからな！」暴徒たちは、ジョセフが霊的に強いばかりか肉体的にも非常に屈強なことを知っていたのである。

彼らはジョセフをかついで果樹園を抜けて行った。そのときジョセフは、シドニー・リグドンが死んだように地面に倒れているのを見た。暴徒がリグドン兄弟のかかとをつかんで家から引きずり出したため、彼は凍った地面に幾度も頭をぶつけて意識を失っていた

発見された事実

末日聖徒にとって興味ある情報

ミュレクの移動に 考えられる ふたつの航路

ミュレクと彼に従う人々が、モルモン経の「約束の地」すなわち新世界に移ったときの航路として、ふたつの可能性が考えられる、とブリガム・ヤング大学のロス・T・クリステンセン博士夫妻が発表した。クリステンセン博

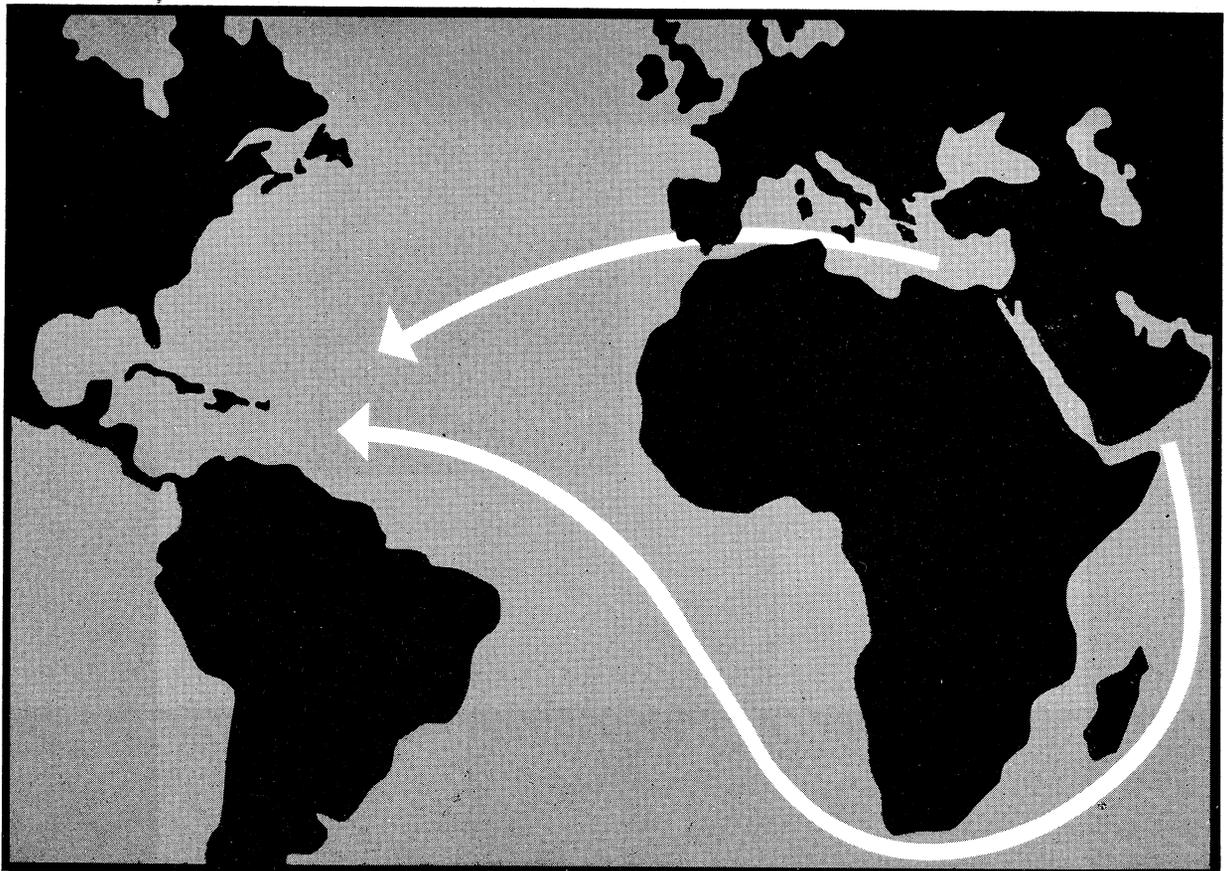
士は、考古学および人類学の教授で、夫人は大学院で考古学を学んでいる。

モルモン経は、ミュレクの民が紀元前6世紀に西周りの航路を取って大西洋を渡ったか、東周りの航路を取って太平洋を渡ったか明らかにしていない。しかし、歴史がはっきり示しているように彼らは「北の地」に上陸しているので、クリステンセン夫妻は、ミュレクの民は大西洋の航路を取ったも

のとみている。

クリステンセン夫妻によれば、大西洋の海流や他の情報を考慮した結果、この初期の航海者が取ったと思われる航路に、ふたつの可能性があるという。ひとつは地中海を経て大西洋北部を横切る航路であり、もうひとつは、アフリカ大陸を迂回して大西洋南部を横切る航路である。

紀元前6世紀は、地中海沿岸の世界



発見された事実

はもちろん、それを越えた世界各地に、探険、商業、植民の足が極めて旺盛に伸びた時代であった。エルサレムの破壊と圧迫されたミュレクの民や他の群れの脱出は、さらに移民の趨勢を倍加した。エルサレムが陥落した当時、キプロス島、クレタ島、リビア、カルタゴにイスラエル人の植民地があったと信じられている。言い伝えによれば、そのうちあるものはダビデとソロモンの統治時代にさかのぼると言う。またダビデとソロモンの時代から、イスラエル人はフェニキヤと通商を行っていたとも言われている。

ミュレクと一緒にアメリカに植民した群れの少なくとも一部は、フェニキヤ人であったとする仮説がある。それはモルモン経に出てくるサイドン川が、古代フェニキヤの主要都市シドンの名前をとっているからである。フェニキヤ人の船員と地中海を横切るヘブル人の植民者に助けられて、ミュレクの群れは地中海を西進し、大西洋に達することができた。ひとたび大西洋に出ると、ミュレクは、スペイン、ポルトガルからアフリカの西海岸に沿って南西に走る強力な海流に乗り、次いで大西洋を西に渡り、弧を描いて西インド諸島の中を進んで行ったことであろう。ミュレクは恐らくこの大西洋横断の短い航路をとったであろう、とクリステンセン夫妻は信じている。しかし、アフリカを周って大西洋南部を横切った可能性についても考察している。

インド洋のマダガスカル島の近くから強力な海流が始まって、ずっと南下して喜望峰をまわり、今度は方向を変えて大西洋南部を西進している。さらにブラジルの東端の北側に達し、その後南アメリカの海岸に沿って北へ進み大西洋北部を流れる海流と合流してい

る。従って、もし船が紅海から出帆して、アフリカ東岸をマダガスカル近くまで航海してきたなら、西インド諸島からメキシコ湾に達する海流に乗ることができたであろう。

これは距離にして地中海経由の航路の2倍以上にも達するが、十分な可能性がある。というのは、エジプト王ネコⅡ世の命令でフェニキヤの船乗りが、紀元前600年にアフリカ大陸を周って航海していることが発見されているからである。これは1498年にバスコ・ダ・ガマが同じ偉業を成し遂げた2100年も前のことであった。

ミュレクの民が航海したのとはほぼ同じ時期に、フェニキヤの航海者が実際に大西洋を渡ってアメリカに達している。彼らは紅海を出帆し、喜望峰を周って大西洋南部を横切り、現在のブラジルに上陸している。ブラジルのパレイバで発見された古代フェニキヤ文字の碑文は、この航海が紀元前534年から531年の間に行なわれたことを示している。

コンピューターで 分析された イザヤ書

聖書学者たちは、イザヤ書が予言者イザヤひとりによって書かれたものか、それとも多くの著者がいろいろな時代に書いたものを構成したものかについて、何世紀も論争してきた。

モルモン経は、予言書の中でも重要な位置を占めるイザヤ書が、ひとりの人の著になるものとしている。モルモン教徒でない学者は、この点を捕えてモルモン経を攻撃している。

しかし、最近ブリガム・ヤング大学が行なったイザヤ書の言語に関する、コンピューターによる徹底的な研究の結果、この書がイザヤの作になること、しかもイザヤ以外の手は加わっていないことが、強力に支持された。

この研究は、旧約聖書学の学者であり、BYUインスティテュート研究所のメンバーであるラリー・L・アダムズ博士の企画であった。

語彙の変化形数百を、35人以上の研究者、さらに顧問技師、その補佐が、300ものコンピュータープログラムと100本以上のコンピューターテープを使って、分析したのである。

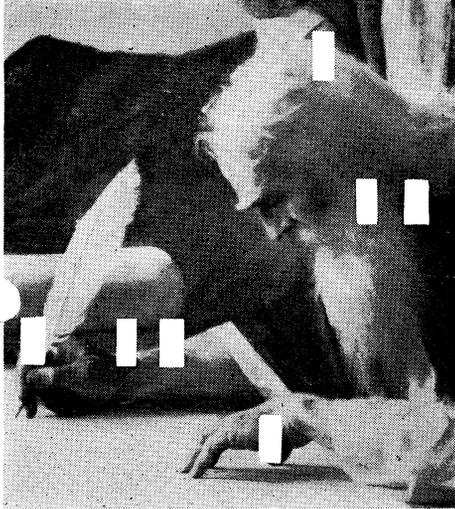
イザヤ書の言葉の研究は従来、語彙の変化形を若干しか取り上げていなかったもので、誤った結論に達していたのであるとアダムズ博士は報告している。BYUが行なった複雑でしかも膨大な研究結果を見て、一部の学者は以前の研究を再検討している。BYUの研究は、イザヤ書の文体を旧約聖書の他の11の書の文体と比較したものである。完全なイザヤ書の本文と、アモス、エレミヤ、エゼキエル、ホセア、ミカ、ハバクク、ゼカリヤ、ダニエル、エズラ、マラキ、ネヘミヤ各書の本文が無作為に抽出されて、使用された。

原語であるヘブル語から取り出した本文にコードが符られ、コンピューターテープに移して、統計にかけられ、分析されたのである。

今回の研究で重要なのは、同一著者の中に見られる文体の相違と、違う著者の間に見られる文体の相違が比較されたことである。

研究の結果、イザヤ書が単独の著者によって書かれたことを支持する次のような事柄が明らかになった。

1. 同一書中の本文に見られる文体



の相違と、旧約聖書の他の書の本文と比較したときの文体の相違と比べると、イザヤ書本文は、高い統一が保たれている。

2. イザヤ書の本文では、ヘブル語の前置詞と接続詞の使用法が類似している。

3. 特徴のある句がイザヤ書の全章に、頻繁に繰り返されている。事実、繰り返しの頻度は、比較の対称となった旧約聖書の他のどの書よりも高かった。

さらに、他の著者の手になるとの説が最も多い部分が、コンピューターによる研究の結果、検査した旧約聖書の他のどの書よりも、イザヤ書の他の部分の文体に似ていることがわかった。

もっとも、アダムズ博士のコンピューターを駆使した研究の結果、イザヤ書本文が書かれた後に、小さな変更が加えられた可能性が、全くなかったというわけではない。

「しかし」とアダムズ博士は言う。「そのような書き換えや、削除、追加はあり得ても、全体の文体がひとりの著者の手になるものであることを示していることは明らかである。」

車がない？ らくだで行こう

モルモン経は、車輪のついた車や馬の記述があるが、スペインの征服者はどちらも目にしなかった。これはどうしてだろうか。

あるいは不思議なことであるかも知れない。しかし、車輪のついた車もっと効率のよい道具に地位を護ったよい例がある。荷車、荷馬車、二輪の戦車が中東諸国における最も初期の、そして最も一般的な交通機関であり、輸送機関であった。これは、数百年続いた。しかし、キリストの頃を境としてらくだあらゆる種類の車にとって代わり始めた。

中東のほとんどの地域で、5世紀末までにはらくだによる輸送機関がすっかり支配的になった。その結果、イスラム教の伝播と共に、らくだはスペインにいたるまで主要な交通機関となったのである。

これは、ハーバード大学の中東学センターで歴史学の助教授をしているリチャード・W・ブリエット博士の発見によるものである。この研究の成果はアラビヤ-アメリカ石油会社の出す、「アラムコ・ワールド・マガジン」に掲載された。

私たちは砂漠といえらくだを思い浮かべるが、ブリエット博士は、キリスト降誕をさかのぼること数世紀にして、やっと遊牧民族がらくだを飼いならすようになったものと信じている。

後に軍事力と結びついて、遊牧民族は、近隣諸国にらくだを紹介したのであった。しかし、商人が車かららくだに乗り換えていったのは、軍事力が原因ではなかった。それは経済的な要因

であった。

らくだに荷車をつける引き具が作れないことがわかると、らくだと牛が比較されることになった。しかし、牛はたくさん飼料を食うと同時に、荷車を作るには、ただでもとほしい木材を必要とした。

古代の経済学者は、らくだによる方が車で運ぶよりも20パーセントも経済的であると計算した。3世紀にローマの皇帝ディオクレチアヌスは、この情報に基づいて、らくだを扱う人々に有利な価格凍結令を出した。

そして遂には、荷車、馬車、二輪戦車、そして多くの道路さえも消滅してしまった。

らくだは何百年もの間、「道路を支配していた」のである。荷車が北部からの貿易商人の影響で強力な競争相手として残っていたのは、トルコのごく一部だけであった。



車が人々の交通機関にとって代わり始めたのは、ヨーロッパの影響力が及ぶようになってからである。しかしそれでもなおらくだは、移動の第一の手段であった。

ブリエット博士によると、らくだが交通の世界から締め出されたのは、やっと自動車が発達してからであった。それでも砂漠の遊牧民族にとって、らくだは依然として第一の交通手段である。

らくだは最後には、最も原始的な部族にとっても恐らく食料としかならず、ついには世界の動物園に引き取られていく身になるかも知れない。

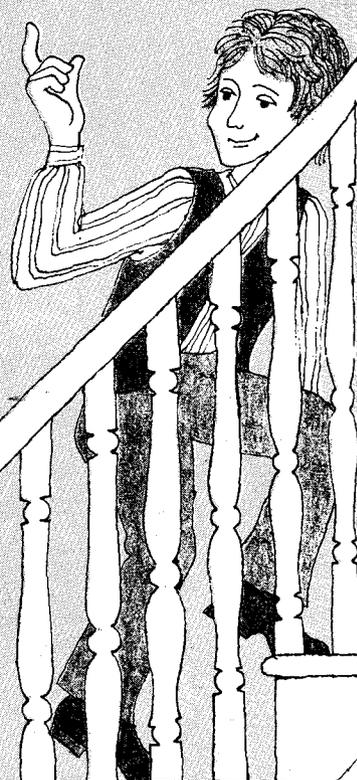


ノーブーのミイラ

W・ラルフ・オドム

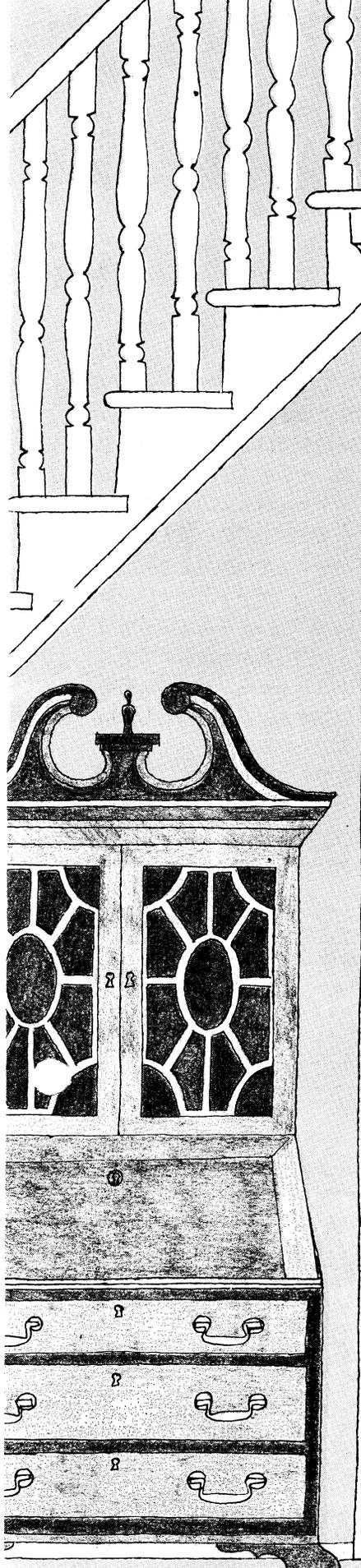
ソロモン・ヘールの日記より

1835年7月3日、マイケル・H・チャンドラー氏は、4体のエジプトのミイラと、何巻かのパピルスを持ってカートランドの地を訪れた。それは、ジョセフ・スミスならその書き物を翻訳できると以前聞いていたからである。その後幾人かの聖徒が共同でそのミイラと巻き物を買取り、予言者は翻訳を始めた。するとそのひとつがアブラハムの書き物であることがわかった。
(高価なる真珠、アブラハムの書の序文を参照)



本文は、ソロモン・ヘールの日記をもとにして書いたものである。ソロモン・ヘールは予言者ジョセフ・スミスの甥で、予言者がここに述べられているエジプトのミイラを入手した当時、ノーブーに住んでいた。

ジョセフ・スミスの甥である私は、その当時としては大きなノーブー館にまつわる数多くの不思議な出来事に遭遇してきた。当時の光景をいろいろと思いめぐらすとき、隣近所の同年齢の子供たちをからかうのに私が好んで使っていたざらを思い出す。



多くの人々は、私のおじが書斎に置いている「ミイラ」についてうわさしていた。しかし、ミイラはどんな姿で、だれのミイラなのかを知っている人はそう多くはいなかったのではないだろうか。人は知ったかぶりをしたがるものだが、御多聞にもれずこの私も、ひねくれたユーモアのセンスから、ノーブーの無邪気な子供たちをからかっては、ひとりほくそえんでいたものだった。知っての通り、私はミイラを見たことがあったし、それらが損傷のないものであることも知っていた。

私はノーブー館の前に私の企ての被害者となる4、5人の子供たちを集めて、間もなく二階の珍しく異様な光景を目にできるだろうと約束した。私は彼らに、これからピラミッドと半獣半人の残忍な悪魔の地に行くことを話した。私たちはミイラの眠っている霊を起すことのないように、ゆっくり階段を上り、ミイラの置かれている部屋に静かに入った。

私はミイラの置かれている小室の前に頼もしい友人たちを一行に並べ、これ以上できるかと思われるほどうやうやしく、視界をさえぎっている黒の垂れ布に手をかけた。

それからゆっくり数を3つ数え、カーテンを横に払った。しわのよった灰色のエジプトミイラに恐れをなして階段を駆けおろる友人たちを見るのは、実に楽しい限りであった。

少したってから通りで彼らに顔を合わせた私は、得意満面であった。そう、きざな笑いさえ浮かべながら。またあるとき私は、古いぼろ布を持って行き、それを持ってムルホーランド通りで彼らを追いかけ回した。彼らには、それはミイラの胸にかけていた布で、その

部屋の中でミイラを若い怪物に変えることができると話していたのである。

ある日、私はおじの家の外で遊んでいるおしの子供たちを見つけた。そこで私はおきまりの口上を伝えた後、彼らを予言者の書斎に連れて行き、いつもの演技を始めた。そして、これから見せるものが実に不思議なものであることを印象づけるために、特に注意を払った。私は演技を変え、本物のエジプトの詠唱が聞こえているかのように振舞った。

その詠唱が終わり、垂れ布を横に払ったが、驚いたことに彼らの反応はなかった。だれも叫び声をあげなかったし、走り出しもしなかった。小さな女の子も恐れなかった。その友人たちの自制心がとても強かったのだろうか、それともだれかがミイラに何か細工をほどこしたのであろう。確かに彼らは何かを見た。なぜなら彼らは、あごが靴のつま先に触れるかと思うほど口をあぐりと開けていたからである。そこで私はその部屋のすみを見回した。すると私の目の前で時計が揺れている。おじが面と向かって立っていたのである。

予言者ジョセフは、ミイラがあったはずのちょうどその場に立っていた。私は怒りを表面に出すことなく警告を伝えるおとなの表情、楽しいが子供っぽいはずらにはもうたくさんだといわんばかりの顔つきを予期したが、そんなものはみじんもうかがえなかった。そこで私は顔いっぱい笑みを浮かべて、私の客を伴って部屋を出、階段を下った。私がノーブーのミイラを見に行ったのはこれが最後で、それからは見たいとも思わなかった。

ジェデダイア・M・グラント

略 歴

ジェデダイア・M・グラントは1816年2月21日，ニューヨーク州ウィンザー郡で，ジョシュア・グラントとアタリア・ハワードの息子として生まれた。

この教会に改宗し，バプテスマを受けたのは1833年3月21日，17歳のときであった。

グラント長老は多くの働きをなした。1835年に最初の召しが与えられた。1835年2月28日，グラント長老はジョセフ・スミス，シドニー・リグドン，フレデリック・G・ウィリアムズの按手により，七十人に聖任された。1845年12月2日，彼は29歳で最初の七十人最高評議員会会員のひとりに任命された。

グラント長老はまた，ソルトレークシティーの初代市長に選ばれた。これは1851年のことである。

1852年には，ユタ准州議会の下院議長となった。

1854年4月7日，ジェデダイア・モーガン・グラント長老は，ブリガム・ヤング大管長により使徒に聖任され，同日，同大管長の第二副管長に支持された。これは38歳のときのことである。

ジェデダイア・M・グラント副管長は熱心な神のしもべであった。そして恐らく精根を使い果たしたのであろう，1856年12月1日，ソルトレークシティーにおいて40歳の若さでこの世を去った。

これは，のちに大管長となった息子ヒーバー・ジェディ・グラントが生まれてわずか9日目のことであった。

葬儀の際，ブリガム・ヤング大管長はジェデダイア・モーガン・グラント長老の功績をたたえて，こう語っている。

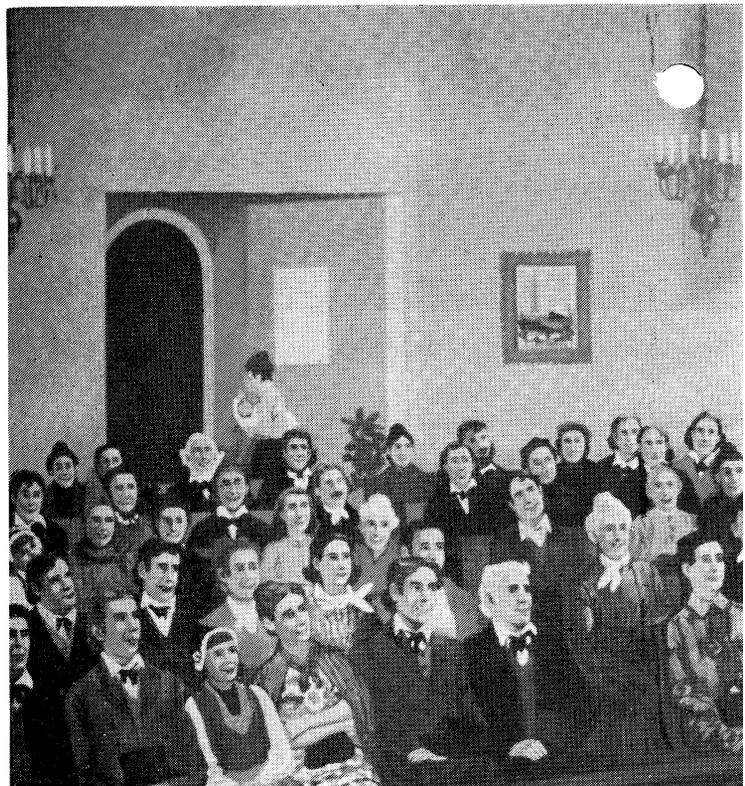
「ジェデダイアがこの教会の会員となってから25年たつ。しかしその間，彼は主に対して100年以上に相当する奉仕をなしたのである。」

「あなたの教会を治めているのは
だれですか」

グラント長老は，バプテスト派の非常に有名な説教者ボールドウィン氏に討論を申し込まれた。グラント兄弟は快く承諾した。討論に選ばれた場所はボールドウィン氏の誇りとする，尊大な信者の集まる大きく立派な教会堂であった。私は

ボールドウィン氏が横柄な態度をした威圧的な人物であると聞いていた。討論の時間が来ると教会堂は満員になった。審判が選ばれ，すべて準備が整った。そのとき，グラント兄弟が立ち上がって言った。「ボールドウィンさん，これから話を進める前にひとつ質問したいのですが。」「いいですとも」ボールドウィン氏が答えた。「バージニア州南西部であなたの教会を治めているのはだれですか。」ボールドウィン氏は厳粛な面持で即座に答えた。「この私です。」「ああそうですか。討論にふさわしい相手かどうか知りたかったものですか。」グラント兄弟が答えた。ボールドウィン氏は少々戸惑った様子で聞き返した。「グラントさん，私もお尋ねしたいですね。バージニア州南西部であなたの教会を治めているのはだれですか。」グラント兄弟は立ち上がり頭を下げて答えた。「イエス・キリストです。」これは相手に大きな衝撃を与えた。この靈感に満ちた返答は高慢な相手をすっかり意気消沈させ，神の謙遜なしもべは再び勝利者となったのであった。

アンドリュー・ジェンソン *The Latter-Day Saints Biographical Encyclopedia* 「末日聖徒伝記百科辞典」〔英文〕P.58



「ごらん下さい。

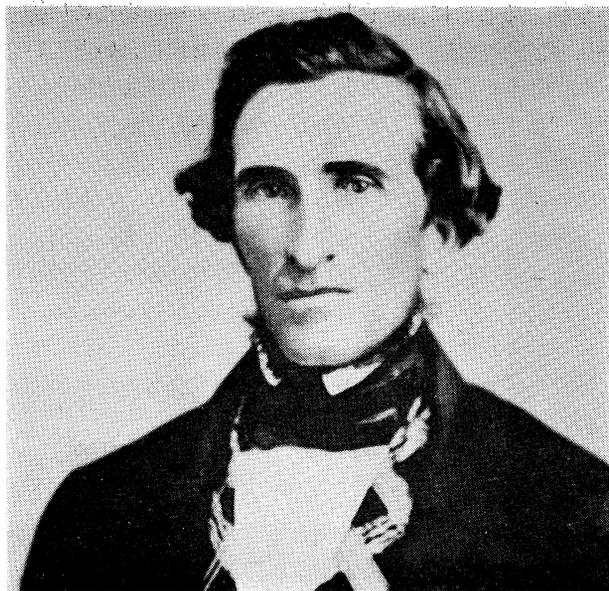
これは白紙です」

グラント副管長が宣教師として働いていた初期の頃、彼は即興の話手としてかなりの評判を得た。しばしば招待を受けた彼は、話を始める直前に招待者が選んだテーマでも堂々と説教をした。やがて多くの人々は、いつどのようにしてあのすばらしい説教を準備するのだろうかと思ふようになった。彼らの疑問に対し、グラント長老は、他の牧師たちがするように説教のために特に話を準備するようなことはないと答えた。「もちろん、いろいろ書物を読んで福音の真理に関する知識は貯えます。しかし、説教をするためにわざわざ机に向かうようなことはありません。」と彼は語っている。しかし、彼らには本当のことを言っているとは思えなかった。なぜなら、十分な準備なしにあれだけの説教をすることは不可能なことにしか考えられなかったからである。そこで何人かの人々が、本当かどうか試してみることにした。時間や場所を定めずに、自分たちが勝手に選んだテーマについて話をしてくれるように求めたのである。そして準備の時間を与えないために、テーマはグラント長老が集会場に着いた時に知らせることにした。グラント長老は彼らの満足がいくように承知した。場所は、テイズウェル郡の郡庁のある町、バージニア州ジェファーソンビルが選ばれた。当時そこには後に陸軍大臣となったジョン・B・フロイドや他の多くの有名な家があった。集会は郡の役所で開かれた。約束の時間が来ると、役所は満員になった。フロイド氏をはじめ大衆の



弁護士や牧師が顔を見せ、最前列に席を占めた。グラント長老は入って来ると前の壇の方に行き、会はいつものように開かれた。讚美歌の2番を歌い終わるころ、この日のために任命されていた書記が前に進み出て、(テーマの書いてある)紙をグラント長老に手渡した。グラント長老が紙を開いてみると、そこには何も書かれていなかった。しかし少しも驚いた様子を見せず、グラント長老はその紙を手を持ち、聴衆に向かって言った。「皆さん、私はきょうこの方々が選んで下さったテーマについて話す

という約束でここに参りました。今そのテーマをここに持っています。皆さん、私に腹を立てないで頂きたいと思います。なぜなら、私は選ばれたテーマについて話すという約束で来たのですから。もしだれかをとがめるとすれば、テーマを選んだ人々をとがめて下さい。どんなテーマが選ばれるか私には一切知らされておりました。しかし、私は他のどんなテーマよりこのテーマが一番得意なのです。ごらん下さい、これは白紙です。(同時に紙を聴衆に見せる)皆様諸宗派の方々は、神が無、すなわちまったく白紙の状態からあらゆるものを創造されたと信じておられるでしょう。ですから、私にも無から説教を始めるように望まれたのだと思います。現にこれは白紙なのです。またあなた方は、骨肉の体を持たず感情もない神を信じておられると思います。そのような神は私に言わせれば、このテーマと同じくまったく空虚なものであると思います。またあなた方は予言者や使徒、伝道者のいない教会に属しておられるでしょうが、そのような教会はキリスト教会と比べると、まったく私のテーマと同じく無に等しいものです。あなた方の天国は時間や空間を超えたところにあると考えておられるようですが、結局は私のテーマのように、そのようなところは無であって存在しないのです。」このようにして彼は、聴衆の主張するすべての信仰上の教義を徹底的にくつがえすまで説教を続け、そのち力強く福音の原則を宣言したのであった。そして次のように質問して話を結んだ。「テーマにそった満足のいく話だったでしょうか。」彼が着席するや否や、フロイド氏が勢いよく立ち上がって言った。「グラントさん、あなたは弁護士になるはずの人ですよ。」それから聴衆に向かってつけ加えた。「皆さん、私たちは今すばらしい説教を聞くことができました。驚いておられる方もいると思います。ところでちょっとグラントさんの服を見て下さい。コートのひじは破れそうですし、ズボンのひざもすり切れています。みんなで洋服代を寄付しようではありませんか。」彼が席に着くと別の著名な弁護士が立ち上がって言った。「グラントさんのためなら、私の洋服の片腕、ズボンの片足を差し上げてもいいですよ」南部のメソジスト監督教会の管理長老が、寄付集めのために帽子を回すよう求められた。すると彼は、「モルモン」の説教者のために寄付集めをする気はないと言って断わった。「いや、それは間違っています」とフロイド氏が言い、「さあ、回して下さい」とストラス氏が言った。すると聴衆も声を合わせてその言葉を繰り返した。そしてとうとうその場を鎮めるために牧師は応じなければならなかった。彼は寄付を集めるために手に帽子を持って回った。その結果、グラント兄弟の背広上下、馬、鞍、それに手綱を買い足すほどのお金が集まった。あとで何人かの人々が末日聖徒になったが、その日末日聖徒でない人々の寄付だけでこれだけの額になったのである。これは、一枚の白紙をテーマとした説教の結果であった。



「……これがマーガレットよ……」

ヒーバー・C・キンボールによる話¹

先週、彼〔ジェデダイア・M・グラント〕に会いに行くと、彼は手をさしのべて私と握手した。話すことはできなかったが、彼の握手は暖かみのあるものだった。そのような彼を見て、私はこみあげてくるものを覚えた。そして起こしてあげたい気持ちに駆られた。共にいて私たちが悪を退け、義を行きわたらせるように助けを与えてほしいと思った。それほど彼は雄々しい人であり、私は彼を深く愛していたのである。…

私は彼の頭に手を置き、彼の肺が良くなって楽に呼吸ができるように祝福し、助けを神に願った。すると2、3分もしないうちに彼は元気を取り戻し、自分の見たことを続けざまに1時間にわたって話してくれた。私は彼の疲労を気づかい、そのあとすぐにその場を辞した。

彼は私にこう言った。「ヒーバー兄弟、私は続けて2晩霊界に行きました。そして今までで一番したくないこと、恐ろしかったことは、再びこの世に戻らなければならないことでした。」「それに」と彼は続けた。「そこは何と秩序と統制のとれた所だったでしょう。霊界で私は義人たちの状態を見ました。彼らはいくつかの階級に分かれて組織されていました。そして眺めている私の視界をささぎるものは、何もないようでした。私はすべての人々がそれぞれの階級に秩序正しくいるのを見ることができました。また何らかの混乱がありはしないかと見てみましたが、そのようなものは一切見当りませんでした。また、死や暗黒、困惑などありませんでした。

彼はそこにいる人々が家族ごとに分れており、すべて階級

ごとに組織され、完全な調和が保たれていたと言っている。彼はひとつひとつを取り上げてこう言った。「まったく、これはブリガム兄弟の言われた通りです。彼が幾度となく私たちに語ったことと同じです。」

これは、ブリガム兄弟が私たちに教えた真理を証するものであり、私もそれが真実であると思っている……。

彼は霊界では義人が共に集まり、その中にはひとりも悪人がいないことをその目で見たのであった。彼は自分の妻にも会った。彼女は彼のところに最初にやって来た。彼は他にも大勢知人と会ったが、妻のキャロライン以外の人とは話を交わさなかった。彼女は彼のところにやって来て言った（彼は妻がとても美しく見え、またその腕には大平原で死んだ小さな娘を抱いていたと言っている）。「……これがマーガレットよ。あの狼に食い尽くされた……。でもここではこんなに元気。少しの傷あともないわ。²」

「驚いたことに、家族を見ると、ところどころ人数が欠けていました。彼らはこの世での務めを良く果たさなかったため、共にその場に来て住むことを許されなかったのです」と彼は言っている。

彼はキャロラインに、ジョセフ・スミスやハイラム・スミス、そして彼らの父親はどこにいるかと尋ねた。すると彼女はこう答えた。「私たちのために仕事を果たすため、先に行っています。」ブリガム兄弟と開拓者たちが、ウインタークオーターズを出てソルトレーク盆地に住居を求めてやって来たとき、彼らは同じように先に来て、開拓者のための住み家を捜したのである。

彼はまた主がソロモンに知恵を与え、その手中に金と銀を与え、彼に技術と能力を示されたことに触れながら、霊界で見た建物のことを話した。そしてソロモンの建てた神殿でさえ、霊界にある建物にははるかに及ばないと言った。

庭についてグラント兄弟はこう語っている。

「私はこれまで地上のすばらしい庭を見てきました。しかし、霊界で見たあの庭には比較になりません。私はまたいろいろな種類の花を見ました。中には1本の茎に50色から100色の違った色の花をつけているものもありました。」この地上にもいろいろな花が咲いている。私はそれらはまさに天から与えられたものであると思う。そうでなければ、そのようなものは地上に存在しないだろう。

彼は目にしたことを話し終わると、義人が共に集まっているあの霊界の美と栄光を見たあとで健康が回復し、この世に再び戻らなければならないことがどんなにうらめしく思われたことかと語った。

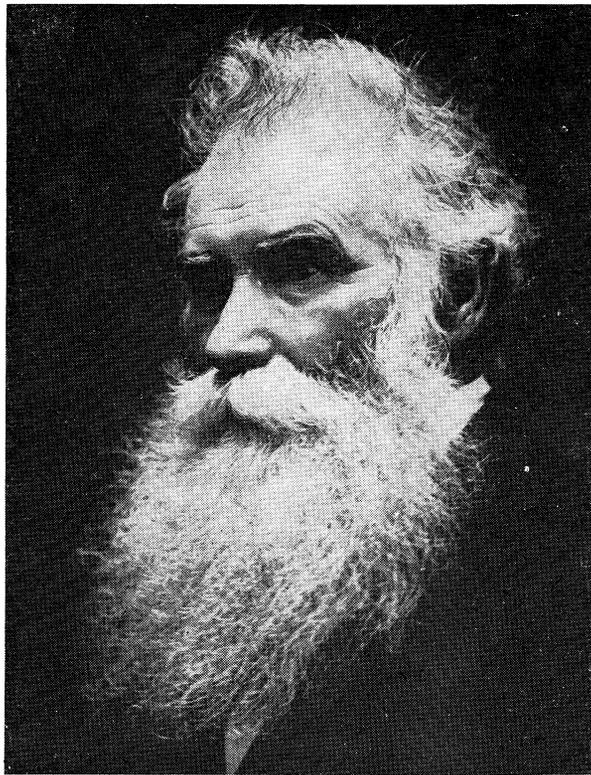
1. ヒーバー・C・キンボール、「ジェデダイア・M・グラント大管長の葬儀における話」説教集第4巻P.135—38〔英文〕
2. マーガレットは大平原で死んだが、後に狼がその墓を掘り返した。

オルソン・プラット

「予言者をたずねて370キロ」

この教会を知る1年ほど前から、私は心の中で真剣に主を求めていた。非常に熱心に求めた。恐らく他のだれよりも熱

心に求めていたと思う。それは18歳のときであり、その頃から19歳になってこの福音に接し受け入れたときまで、非常に熱心に主を求め、そのことに集中したので、十分休んでいる暇さえなかった。月ぎめで農業や重労働をしながら、人々が休息をとるために家に入っても、私は畑や荒野に出て行き、自分のなすべきこと、自分の生きる道を教え、知識を得させたままと何時間も主に嘆願した。他の多くの人々と同様、私もいろいろな宗教の集会に参加した。メソジスト派やバプテスト派の集まりにも出向いて行った。また長老派の集会にも出席し、彼らの教義を聞いた。すると多くの人々が私を彼らの教会に加入するよう熱心に勧め



略歴

オルソン・プラットは1811年9月19日、ニューヨーク州ハートフォードでジェレド・プラットとチャリティー・ディッキンソンの息子として生まれた。彼は使徒パーレー・P・プラットの弟である。

プラット長老は1830年9月19日にバプテスマを受けた。370キロを旅して、ニューヨーク州フェイヤットにいる予言者ジョセフ・スミスに会いに行っている。彼はまたこのときに3人の見証者とも知り合いになった。

1835年4月26日、彼はオリバー・カウドリ、デビッド・ホイットマー、マーテン・ハリスから按手を受け、使徒に聖任された。彼はこの神権時代の最初の十二使徒定員会の12名の中に名を連ねた人である。この主の召しを受けたとき、彼はわずか23歳であった。プラット長老は教会の多くの業に携わったが、すぐれた学者、著述家、教師であり、雄弁な話し手でもあった。

オルソン・プラット長老は、1881年10月3日ソルトレークシティで亡くなっている。

た。しかし、私は何かがそうしないようにささやくのを聞いた。こうして私は彼らのどの教会にも加わらず、絶えず心の中で主が正しい道を示して下さるように祈っていた。

このような状態が1年ほど続いた頃、この教会のふたりの長老が近くにやってきた。私は彼らの教えを聞き、それが古代の福音と同じものであると信じた。そして彼らの言葉が私の耳を打つや否や、私は聖書が真実であるに違いないと確信したのである。彼らは儀式だけでなく、信じる人々に約束されている賜や祝福、儀式を施すために教会に必要な権能についても教えてくれた。私は心から喜んでそれらの教えを受け入れた。この教会の原則に対する憎悪の気持や、この教えが本当でないように願う思い、また逆に真実ではあるまいかという不安と恐れ気持、それらはひとかけらもなかった。む

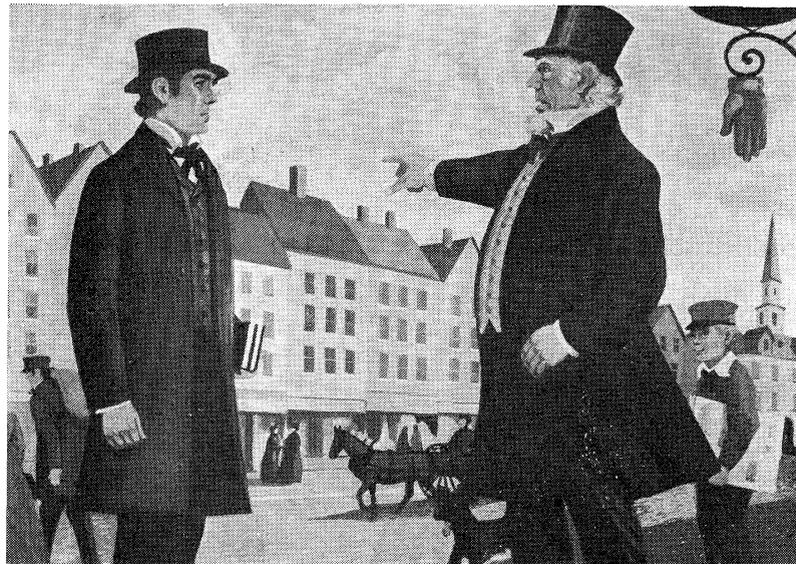
しる私は、古代の福音の原則が地上に回復されたこと、またその原則を説く権能が回復されたことを信じて喜びに満たされたのである。私は若くして、また神の王国建設の夜明けにそのようなすばらしいおとずれを耳にし、喜びでいっぱいだった。それから私はバプテスマを受けた。しばらく後まで、その地方でバプテスマを受けたのは私ひとりであった。私はすぐに仕事を整理すると、予言者をたずねて370キロの旅に出た。

「すぐにくびすを返して……」

教会が組織された初期のことは省いて、十二使徒が選ばれた頃のことについて話したいと思う。それは1835年のことだった。これ以前に、私たちは神の戒めと啓示により数人で予言者ジョセフ・スミスに伴いミズーリ州に向かった。ジョセフの指示に従い私は数カ月間ミズーリ州クレイ郡に留まり、その地方に散在している聖徒を訪ねて教えを説き、励まし、彼らに手書きの啓示を見せることになった。というのもそれまで彼らは与えられた啓示全部を完全に知らされていなかったからである。この仕事を成し終え、ミズーリ州西部の教会の多くの支部で福音を説いたのち、私はオハイオ州に戻るため再び1,600キロの旅に出た。その途中でも福音を説いた。ひどい熱と悪寒にさいなまれながら、沼地のぬかるみを通り抜け、20キロから30キロ先まで一軒の家も見当たらない、暑い太陽の照りつける草地に、身を横たえたこともあった。このようにして、未開の陰気な土地を歩き続けた。そしてひどくなる一方の悪寒や高熱と闘いながら、数カ月後、やっと予言者の住むオハイオ州カートランドにたどり着いたのである。その間私は、教会の支部をいくつか設立し、続いてオハイオ州都コロンバスに足を向けていた。私は末日聖徒がいるかどうかもわからない見知らぬその町へたったひとりで徒歩で出かけて行った。町の混雑した通りを歩いていると、すれ違ったひとりの男の人の顔が目にとまった。私はすぐにくびすを返してあとを追いつき、このコロンバスの町に「モルモン」と呼ばれる人がいないかと尋ねた。すると彼は言った。「私です。この町に住んでいるモルモンは私だけです。」私は非常に驚いた。そしてその人に言った。「大勢の人が行き交うこの大都市で、この町でただひとりの末日聖徒に声をかけることができたとは何という恵みでしょう。」私はそれが神の啓示、神の力の現われであったと思っている。彼は私を家に案内し、カートランドの仲間が出版した新聞を見せてくれた。その新聞には私の名前が出ており、すでに召されていた十二使徒と共に神殿で会合できるよう、何日の何時まで

にカートランドに戻って欲しいという通告が出ていた。その日時は間近であった。十二使徒は選ばれ、評議員会としての最初の務めが始まろうとしていた。私は何カ月間も見知らぬ土地を回っていて、その新聞を目にすることがなかったのである。

私は徒歩で旅することに慣れていたが、徒歩でカートランドへ帰っている余裕はなかった。結局、指定された時間に間に合って帰ることは無理なように思えた。しかし、ちょっとした援助を得て、私は一番最初に出る駅馬車に乗り込み、大急ぎでカートランドに向かった。カートランドから4キロ離れたウイロビーで馬車を降り、そこからカートランドまで歩いた。そして、日曜の朝の会合が開かれるちょうど指定された時間に、私は到着したのである。私は途中で置く間もなかった旅行カバンを手にはさげたままその場に入って行った。そこで私はジョセフ、オリバー・カウドリ、デビッド・ホイットマー、マーテン・ハリスその他のモルモン経の見証者に会った。また少し前に召され聖任された十二使徒たちにも会った。彼らはその日、完全に組織された評議員会として、最初の任務をなす資格を得るために集まっていた。そして不思議なことに、その会合の中でもまたそれより前の会合でも、私が必ずその日の会合に来るだろうということが予言されていたのである。彼らは私からずっと何の消息も得ておらず、私の居所さえわからなかったにもかかわらず、そう予言していたのである。彼らは私がミズーリ州に行き、数カ月前そこを出たということしか知らなかった。しかし、主は彼らに予言のみたまを注がれ、私が必ずその会合に来ることを彼らに予言させたのである。私がその会合の席に入っていくところを見た多くの聖徒たちは、自分の目を疑った。しかし予言は彼らの前で確かに成就したのである。私はこれらのことがすべて神のみたまの奇跡的な顕れであると信じている。



ジョージ・A・スミス

略歴

ジョージ・A・スミスは1817年6月26日、ニューヨーク州セントローレンス郡ポツダムに生まれた。彼の父親は、ジョセフ・スミス（初代）の兄弟ジョン・スミスであり、母親はクラリッサ・ライマンであった。ふたりは息子をジョージ・アルバート・スミスと命名したが、ジョージは一生ジョージ・A・スミスと名乗った。

ジョージ・Aが11歳のとき、家族はジョセフ・スミス（初代）よりジョージのいここにあたるジョセフ・スミス（二代目）の受けた示現や経験を証した手紙を受け取った。それから間もなく、おじのジョセフ・スミス（初代）が翻訳されて間もないモルモン経を持ってポツダムにやって来た。ジョージの母親が最初に教会に加入した。1832年の春、ジョージの父親ジョン・スミスがバプテスマを受け、末日聖徒イエスキリスト教会の会員となった。ジョージ・Aは1832年に初めていとこのジョセフ・スミス（二代目）に会った。そして1832年9月10日、教会の会員となった。

1835年3月1日、ジョージ・A・スミスは七十人最高定員会への後任会員として聖任された。それから3カ月後、彼は合衆国東部へ最初の伝道に出た。

ジョージ・Aは英国へ伝道に行くように任命されていた。そこで彼はすぐにこの大切な召しに携わった。1839年4月26日、彼は21歳で使徒に聖任された。

ブリガム・ヤングはジョージ・A・スミスを「歴史の宝庫」と呼び、オルソン・ホイットニーは彼を「何でも知っている生き字引き」と呼んだ。このようなことを考えると、1854年4月7日に彼が教会の歴史記録者に召されたのも驚くにあたらない。彼は16年間この職についた。

ジョージ・Aは1856年にユタ准州の代表としてワシントンに向かい、ユタを正式な州として認可するよう請願した。

1868年にはジョージの生涯の友、ヒーバー・C・キンボールが亡くなった。その年の10月の大会で、ジョージ・A・スミスはブリガム・ヤング大管長の第一副管長に召された。

ジョージ・アルバート・スミスは1875年9月1日、ソルトレークで死去した。

「金版聖書」

8月のことである。おじのジョセフ・スミス（初代。予言者の父）と彼の一番下の息子ドン・カルロスが、モルモン経

を数冊持って父の家にやってきた。父は18年振りでおじに会えてとても喜んだ。彼らは私たちの家から400キロも離れたニューヨーク州西部のウェイン郡やオンタリオ郡に住んでいた。おじは祖父にすぐ会いたいということであった。そこで翌日、私の父は一頭立ての馬車を仕立てると、19キロほど離れた私の祖父とおじたちの住むストックホルムにおじを連れて行った。母と私は土曜日から日曜日にかけてモルモン経を読んだ。そして日曜日の夕方には、隣人が「金版聖書」と呼んでいるモルモン経を見にやって来て、その本についているいろんな批判を浴びせ始めた。私はその本を信じてはいなかったが、彼らの批判が取るに足らないばかげたものに思えた。そこで彼らの批判に意見を述べ、彼らの考えが誤っていることをはっきり指摘すると、彼らは混乱してしまって帰って行った。

私はモルモン経を読み続け、その書物が偽りであることを裏付けるに十分な異論を頭の中で整理した。そしておじのジョセフが戻って来ると、私はその問題について彼に議論をしかけた。しかし、彼は私の疑問を明快に解いてくれた。そして私の心は開かれ、それ以来、私はこの書物が神聖な書物であることを擁護し続けているのである。

ゾラ・スミス, *Ancestry Biography and Family of George H. Smith* 「ジョージ・H・スミスの家族と先祖の伝記」 [英文]
P. 44





「小川の氷を砕いた」

私の父は数年間ずっと健康状態が悪く、バプテスマの前の6カ月間は、家畜の世話さえできない状態だった。隣人は皆、そんな父がバプテスマを受けたら死ぬだろうと思っていた。私は小川の氷を砕いた。そして60センチも積もった固い雪をかき分けて、200メートルほど道を作った。その日はとても寒い日だった。隣人は父が水の中で死ぬのではないかと思いつながら、驚きのまなざしで様子を見守っていた。しかし父の健康はその時から快方へ向かったのである。

ジョージ・A・スミス、「Memoirs」「回顧録」(英文) P.5

「牧師はあたふたと その場を逃げ去って行った」

私が説教をし終わると、ひとりのルーテル教会の牧師が立ち上がり、この人はモルモン経は真実であり、それを信じない人は永遠に罪に定められると語ったと言った。続けて言った。「さて、皆さん、その証拠がなければ罪に定められるようなことはありません。聖書については、次の3点で真実の書物であることが証明されています。第1に聖書に出てくる地名はみな地図にあります。しかしモルモン経に出てくるゼラヘムラの地名は地図に出ているでしょうか。第2に聖書には原本があります。では、モルモン経の原本はどうでしょうか。見せることができますか。第3にモルモン経の翻訳が有

能な人々によってなされたという証拠が必要です。これらの証拠を見せて頂きたいと思います。聖書については、これら問題に対して私たちは解答を持ち合わせています。証拠はそろっています。モルモン経にも同じような証拠が必要であると思います。さもなければ私たちはその本が偽りであって、それを布教する者は悪魔の子であると言わざるを得ません。」

私は、これに答えて、この紳士はそれほど人望のあつい人とは思えない、もし公正な人であれば、これだけの聴衆の前で、私がモルモン経を信じない人はみな永遠の罰を受けるなどと言ったとは口にしなかっただろうと反論した。そして、私がそのようなことを一切言わなかったことを聴衆が認めていることは、あなたも知っているはずですが、とも言った。すると彼は話をささぎって大声で言った。「ゼラヘムラの地図を見せる。」そこで私は答えて言った。「あなたが創世紀のノドの地を地図の中で示してさえくれたら、いつでもゼラヘムラがどこにあるかお見せしましょう。」すると彼は言った。「モルモン経の原本を見せてもらいたいものですね。聖書の原本ならいつでもお見せできますよ。」私は答えて言った。「神が御自身の指で十戒を刻まれた石板や、モーセが律法の書を書いた羊皮紙、それにエゼキエルが書いているふたつの木を持ってきてさえくれば、モルモン経が翻訳された金版をお目にかけてみましょう。」

聴衆の間に笑いが起こり、牧師はののしりながらあたふたとその場を逃げ去って行った。

スミス、「回顧録」P.49

1820年の春のこと

ひとりの少年がひざまずいて祈っていた。
するとそこに、
父なる神と御子があらわれたもうた。

おふたまた
御二方は少年ジョセフに言われた。

「私の教会を回復するために、
私があなたを選んだ」と。

ジョセフは主の予言者。
天が開け、福音が回復された。
何とすばらしいことだろう。

今から150年も昔、ニューヨーク州バルマ
イラで、ジョセフ・スミスという少年が森に
入って祈りました。ジョセフは、どの教会が
ほんとうの教会なのか、それを知りたいと思
いました。

ジョセフの祈りは、すばらしいその朝に、

ふしぎな方法で答えられました。天のお父さ
まと御子イエス・キリストがジョセフの前に
あらわれたのです。

ジョセフ・スミスの最初の示現について、
次の中から正しいものを選びましょう。

1. ジョセフ・スミスが祈ったのは、

イ. 1830年の秋

ロ. 1820年の春

ハ. 1847年の冬

でした。

2. そのときジョセフは

イ. 10さい

ロ. 18さい

ハ. 14さい

でした。

3. ジョセフは聖書の

イ. ヤコブ書

ロ. マタイ伝

ハ. ヨハネ伝

を読んでいました。

4. そこには

イ. 求めよ、そうすれば見いだすであ
ろう。

ロ. 門をたたけ、そうすればあけて
もらえるであろう。

ハ. あなたがたのうち、知恵に不足
している者があれば、その人は
とがめもせずに惜しみなくすべ
ての人に与える神に、願い求め
るがよい。

と書いてありました。

5. ジョセフは、

イ. 教会に行くべきかどうか

ロ. どの教会に行ったらいいか

ハ. なぜ教会に行くべきか

を知りたかったのです。

6. 救い主はジョセフにこう言われました。

イ. お母さんが行っている教会に行
きなさい

ロ. どの教会も正しくない

ハ. 教会などには行かないほうがよ
い

7. そしてジョセフは

イ. 末日聖徒イエス・キ
リスト教会の最初の
予言者

ロ. 主の忠実なしもべ

ハ. 人々の立派な指導者
になりました。

イ(1) ロ(2) ハ(3)
イ(1) ロ(2) ハ(3) イ(1) ロ(2) ハ(3)

マーガレット・C・リチャーズ
キャロル・C・マドセン
絵：ハワード・ボスト

小さな お友だちへ



大会での お話

みなさんはどんな人でしょうか。そう、みなさんすべてが神さまのむすこむすめです。みなさんの霊は、この世界ができる前からつくられていました。そして前世というところで、戒めによく従ったので、こうして肉体が与えられたのです。前世でどのように生活したかによって、今の家族のところに来ることが決められました。

わたしたちが、天のお父さまや救い主であるイエスさま、そしてわたしたちお互いのすばらしい関係に気づくならば、生活は見ちがえるように変わっていくことでしょ。

大管長 ハロルド・B・リー

国や人種、文化がちがうことは問題ではありません。私たちは福音に従うことによって、平和で自信にみちた生活を送ることができます。

ジェームズ・A・カリモア

この世界はあなたのためにつくられました。そしてキリストは、あなたをあがなうために来られました。福音はあなたのために回復されました。主はあなたの祈りに答えてくださいます。神はあなたのことを心にとめておられます。それはあなたが神のむすこ、むすめだからです。

エルドレッド・G・スミス

キリストは「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」と言われました。私たちににとって一番近い隣り人は家族です。このことをわすれないでください。次は隣りに住んでいる人、そして同じ通り、同じ市、同じ県、同じ国、こうして全世界の人が隣り人になります。私たちが、何らかの点で関係し、影響している人はすべて私たちの隣り人です。

O・レスリー・ストーン

みなさんの中には、教会員のあまりいない学校に行っている人がいることでしょう。みなさんが教会の標準に従って、自分自身を正しく導き、人格を高めるならば、みなさんの光(もはん)は高く輝き、それを見るすべての人々をてらすことでしょう。

デビッド・B・ハイト

教会の清い音楽の中から、よく知っている歌で、わたしたちを高め、敬けんにさせてくれる歌をあげてください。「わたしは神の子」のような歌がよいでしょう。よく意味を考えて、覚えてしまってください。そして、何を考えたらいいかかわからないときにはこれを思い出しましょう。

ボイド・K・バックー

働くことにかわるものはありません。なまけ者になってはいけません。主は、わたしたちがまじめであることを望んでおられます。そして、心もからだもはつらつとなるように願っています。

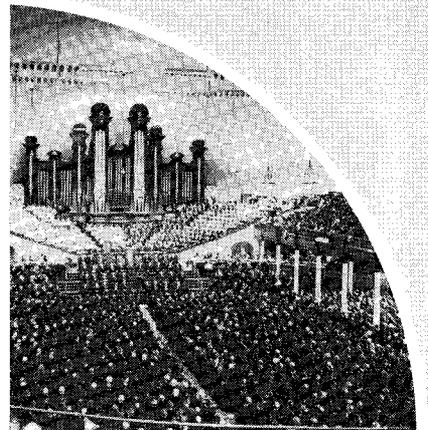
ボーン・J・フェザーストーン

女の子は成長していくの日か女性になります。ですからそのために準備することはとても大切です。少女の皆さん、兄弟たちに及ばず皆さんの影響力をみくびってはなりません。皆さんが兄弟たちの愛を認めて、敬うとき、兄弟たちは清く、立派で幸せな人になることができるのです。

N・エルドン・タナー

お父さんを敬い、従ってください。いろいろなことをしてくれるお父さんを愛し、理解し、そしてその働きに感謝しましょう。

ジェームズ・E・ファウスト



わたしたちが永遠の父なる神の子供たちで、いつの日か父なる神と住むことができるということは、なんとすばらしいことでしょうか。また、父なる神が、そして死からよみがえられてすべての人の罪をあがなわれたイエス・キリストが、どのような御方かを知ること、なんとすばらしいことでしょうか。

リブランド・リチャーズ

わたしたちに生ける予言者ハロルド・B・リーが与えられていることは、最高の祝福です。リー長老は立派な方で、わたしたちがたたえ、尊敬できる人です。またリー長老の教えや助言や導きは信頼できるものです。

デルバート・L・ステイブレー

アダムから今日のわたしたちの予言者ハロルド・B・リー長老にいたるまで、すべての予言者は、神の最初の霊の子であるイエス・キリストがわたしたちのあがないの主となるよう選ばれたことを証してきました。

マリオン・G・ロムニー

もし主が地上におられたら、すべての予言者たちが言っているのと同じことを、今のわたしたちに言われるにちががありません。

ブルース・R・マッコンキー

什分の一の祝福

■大会から帰ってきたネルは大急ぎで服を着がえると、はだしのまま、ころげるように外にとび出して行きました。ネルは、きょう大会でスノー大管長から聞いたことを、おとうさんに話したくてたまらなかったのです。

それは1899年の6月のことです。ネルが住んでいたユタ州の南部では、もう2年以上も雨が一滴も降っていませんでした。そのため、セント・ジョージにある小川や井戸は、どこも干あがってしまいました。水がないので、作物が育ちません。牛や馬はバタバタと死んでいくしまつです。人間が生きていくのもむずかしくなってきました。そこで、ネルの家族もよその土地へ引っ越すことになり、おとうさんは引っ越しの準備の最中でした。きょうはロレンゾ・スノー大管長が遠くのソルトレークシティからこの町へおいでになり、みんなにお話をしてくださることになっていました。おとうさんはこのことを知っていました。でも引っ越しの準備はたいへんです。そこでおとうさんは家に残って、朝早くからひとりで荷車に荷物を積んでいたのです。

「おとうさあん、ねえ、おとうさあん」ネルは走りながら大声で呼びました。「もうそんなことしなくてもいいのよ。わたしたちはずっとここにいられるの。きょうね、大会でスノー大管長がおっしゃったのよ。わたしたちが什分の一をちゃんとはらって、畑をたがやせば、きっと雨が降るって、それでまた小麦やじゃがいもができるようになるって！」

でもおとうさんは、ネルの言っていることが信じられないようでした。そして、荷車のながえ*にこしをおろすと、草が1本もはえていない荒れほうだいの畑を、ただじっと見つめるばかりだったのです。

おとうさんは、ほかの土地へ行ったほうがよいと、いつも家族に話していました。それもそのはずです。食糧をためておいたたには、もうほとんど食べる物がありません。それに残っているお金といえば、おじいさんがネルにくれた20ドルだけだったのです。

その夜おそくネルは、夕食のしたくを手伝っていたおとうさんが、おかあさんにこんな話をしているのを耳にしました。「あしたの朝6時にここを出発することにする。そうすればお昼までにはトムソン兄弟の農場に着くと思うんだ。」

みんなは食卓に着きました。でもみんなしょんぼりしています。ネルはとても悲しかったので、何も食べたくありませんでした。ネルは大きく息を吸ってから、思い切ってこう言いました。「ずっと前にね、おじいさんが話してくれたことがあるの。おじいさんたちは、ブリガム・ヤング大管長がこ



うしなさいと言われたことを、そのとおりにしたんですって。」そうしたらとてもよいことがあったって。」

それを聞いたネルのおとうさんとおかあさんは、食べるのをやめて、じっとネルの話に耳をかたむけました。ネルは続けました。「わたしもそのとき生きていたら、やっぱり予言者のいうとおりにしたと思うって言ったの。そしたらおじいさんがね、ブリガム・ヤング大管長もそうだったけど、スノー大管長は今、生きていらっしゃる予言者だって言った。だからスノー大管長のおっしゃるとおりにしなくちゃいけないって。」

こう言い終わるとネルは、あの大切な20ドルを持って来てくれるように、おとうさんにたのみました。「このお金をソーン監督に渡しませうよ、セント・ジョージに雨が降るように。」

次の朝早く目をさましたネルは、まどの外を見てみました。いつもと変わりなく、ほこりっぽい風が吹いているだけでした。でもおとうさんの畑仕事を手伝おう。急いで洋服を着ると、ネルはからからにかわいた地面を走って行きました。

ネルが走って来るのに気づいたおとうさんは、馬をとめてネルをだきあげました。ネルが飛びつくと、おとうさんはにこにこしながら言いました。「おはよう、おねぼうさん。けさはずいぶん早いねえ。おとうさんのお手伝いをしてくれるのかい。」

でも、いつまでたっても雨は降りませんでした。セント・ジョージの人々は、毎日まっ青な空を見上げては、がっかりしていました。とても雨など降りそうもありません。ところが8月2日のことです。とうとう、みんなが待ちに待っていた雨が降り始めたのです。みんなは大喜びをしました。でも、ネルとおとうさんは少しもおどろきませんでした。ふたりは雨が降ったわけを知っていたからです。

*荷車を馬に引かせるために、荷車と馬をつなぐ棒

■ジョセフは、しめっぽい畑からいっしょうけんめいにじゃがいもを掘り出していました。ジョセフの家はとても貧しかったので、食べる物がほとんどありませんでした。あるものといったら、いら草の葉とか、あざみとか、ゆりの根のようなものばかりだったのです。このじゃがいもは、ぼくたちのためにおかあさんが作ってくれたんだと、ジョセフは思いました。掘り終わったら、ゆでて、あったかくなまっ白いぼくぼくのじゃがいもに、バターをたっぷりぬって、おなかいっぱい食べよう。

掘り終わると、おかあさんがやって来ました。そしてジョセフに、よくできたじゃがいもは荷車に積んで、什分の一をおさめる場所に持って行くように言いつけました。おかあさ



んは、正しいと思うことはどんなことでもやりとげる人だということを、ジョセフは知っていました。そこでだまって、言われたとおりにしました。まず什分の一としておさめるために、よくできたものを選び、それを荷車に積みました。そして、残りを家族のために残しておきました。

後に、ジョセフは末日聖徒イエス・キリスト教会の第6代大管長になりました。そのときのことを思い出して、ジョセフ・F・スミス大管長はこのようにおっしゃいました。

「あのころ、わたしはまだ小さな子どもでしたが、荷車を引いて、什分の一をおさめる所へ行きました。階段のところ、じゃがいもを荷車からおろそうとしていると、ウィリアムという書記をしている人が来て、母にこう言ったのです。

『スミスさん、あなたは什分の一をはらわなくてもいいですよ。』

ウィリアムさんは、そのほかにもいろいろなことを言いました。すると母はおこったようにこう答えました。『ウィリアムさん、それはとんでもないことです。あなたはわたしたちが祝福を受けられなくてもよいとおっしゃるのですか。もし什分の一をはらわなければ、祝福を受けることはできませんわ。わたしが什分の一を払うのは、神様の律法だからというだけではないんです。大きな祝福を得られると信じているからです。什分の一やそのほかのいましめを守ることは大切です。そうすれば、主はいつもわたしたち家族を守ってくださるでしょう。わたしはそう信じています。』

絵 テッド・ヘニンガー

最初の

じゅんきょう者

イエスさまの12人の弟子たちは、イエスさまがおなくなりになった後も、いっしょうけんめいにおしえをのべつたえて歩きました。でも、そのほかにもしなければならぬことがたくさんありました。たとえば、お金をどういうふうに使ったらよいかとか、貧しい人の世話をすることなどです。そこで、こういうことをする人を選ぶことになりました。こうして7人の信仰のあつい、かしい人が、大ぜいの中から選ばれました。

この人たちは、執事と呼ばれました。使徒たちはこの人たちの頭の上に手をおいて、一人一人祝福しました。それからというもの、この7人の人たちは、いっしょうけんめいに使徒たちのお手伝いをしたのです。

最初に選ばれたのは、ステパノという人でした。ステパノはとても信仰があつく、りっぱな人でした。そこで、それまでイエスさまのおしえを信じなかった人々も、ステパノのことを聞いて心を動かされました。ステパノは聖霊にみたまされて、つぎつぎとふしぎなことをしていきました。このうわさはエルサレム中に知れわたりました。

ユダヤ教徒たちもステパノのうわさを聞きました。そこでステパノを呼んで、話をさせ、ステパノをこまらせようと思いました。ところが、ステパノはとてまかしくいばかりか、聖霊にみたまされていたので、ユダヤ教徒たちはステパノの悪いところを見つけることができません。でも何とかしてステパノをやっつけてやろうと思いました。そこで悪い人々に、ステパノの悪口を国中に言いふらすように命令したのです。ステパノは神様やモーセの教えを守っていないといううわさが広まりました。ステパノを石で打ち殺してしまえ、悪い人たちは口々にそうさげびました。

ステパノはつかまえられて、^{りっぼう}律法学者たちの前につき出されました。うそのうわさを言いふらした人たちもそこに来しました。そしてこう言いました。「この人は悪いことばかり言います。それに、してはいけないといわれていることを、平気です。ナザレのイエスは、このきよい場所をこわしてしまおうとか、モーセが伝えたならわしを変えてしまおう、とか言っていましたよ。」

そこにいた人々がステパノを見ると、これはどうしたことでしょう。ステパノのまわりは、まばゆいほどにかがやいていました。そしてステパノの顔といたら、まるで天使のように光りかがやいているではありませんか。それでもうそをついた人たちは、なおもステパノの悪口を言いました。そこで大祭司はステパノに、「この者たちの言うことはほんとうか？」とたずねました。

ステパノは、殺されるかも知れないと思いました。でもすくくと立ち上がると、ゆうかんにほんとうのことを答えたのです。そしてアブラハム、ヨセフ、モーセなどの予言者について話しました。昔の人たちが神様のおしえにしたがわなかったので、ほろぼされてしまったことも話しました。また、神様の子どもであるイエス・キリストを殺した人たちは、いつかきつとひどい目に合うとも言ったのです。

わかいステパノが、自分たちのしたことをせめたので、そこにいた力のある人たちは、はらをたてました。そしてステパノをおどしはじめました。でもステパノは、そのときじつと天を見つめていました。すると、神様とその右にイエスさまが現われたではありませんか。それを見たステパノは、いっぺんにゆうきがでてきました。「神様とその右にイエスさまが見える。」ステパノは言いました。

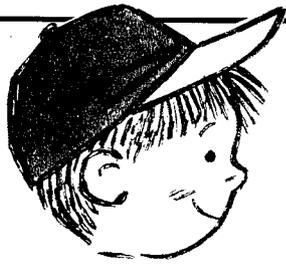
すると力のある人たちは、ステパノのことばを聞くまいと耳をふさいでしまいました。とてもおそろしくなった人たちは、ステパノにはらを立て、ステパノを町の外に引きずり出しました。そして石を投げつけ始めました。悪いことをした者には、石を投げつけるというのが、このころのきまりだったからです。思いっきり石を投げるには着物がじゃまです。そこで人々は着物をぬいで、それをサウロというわかい男の人のところにおきました。

石を投げつけられている間も、ステパノは天を見上げて、ひざまずき、いっしょうけんめいにお祈りしました。「わたしたちの主、イエスさま、わたしをあなたのところへ行かせてください」と。それから最後に、大声で神様を呼び、自分に石を投げつけている人たちをゆるしてあげてください、とたのみました。

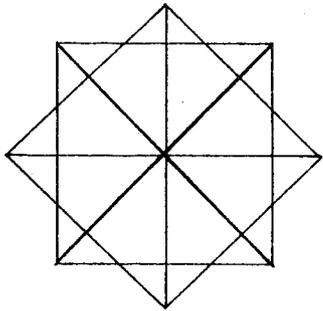
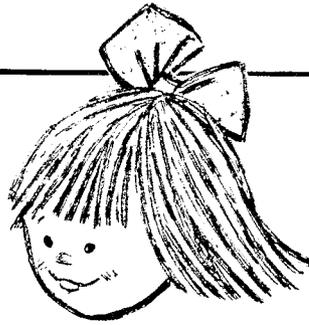
イエスさまが十字架にはりつけにされた後、イエスさまのおしえを伝えていたたくさんの人々が殺されました。そのうちで、最初に殺されたのが、ステパノだったのでした。

ステパノが殺されたことを聞いた友だちは、なきがらをひきとり、ていねいにほおむってあげました。ステパノは正しいことをして、ゆうかんに死んでいきました。だから友だちは、ステパノのことを思い出してはなっていたということですよ。（使徒行伝6章、7章）





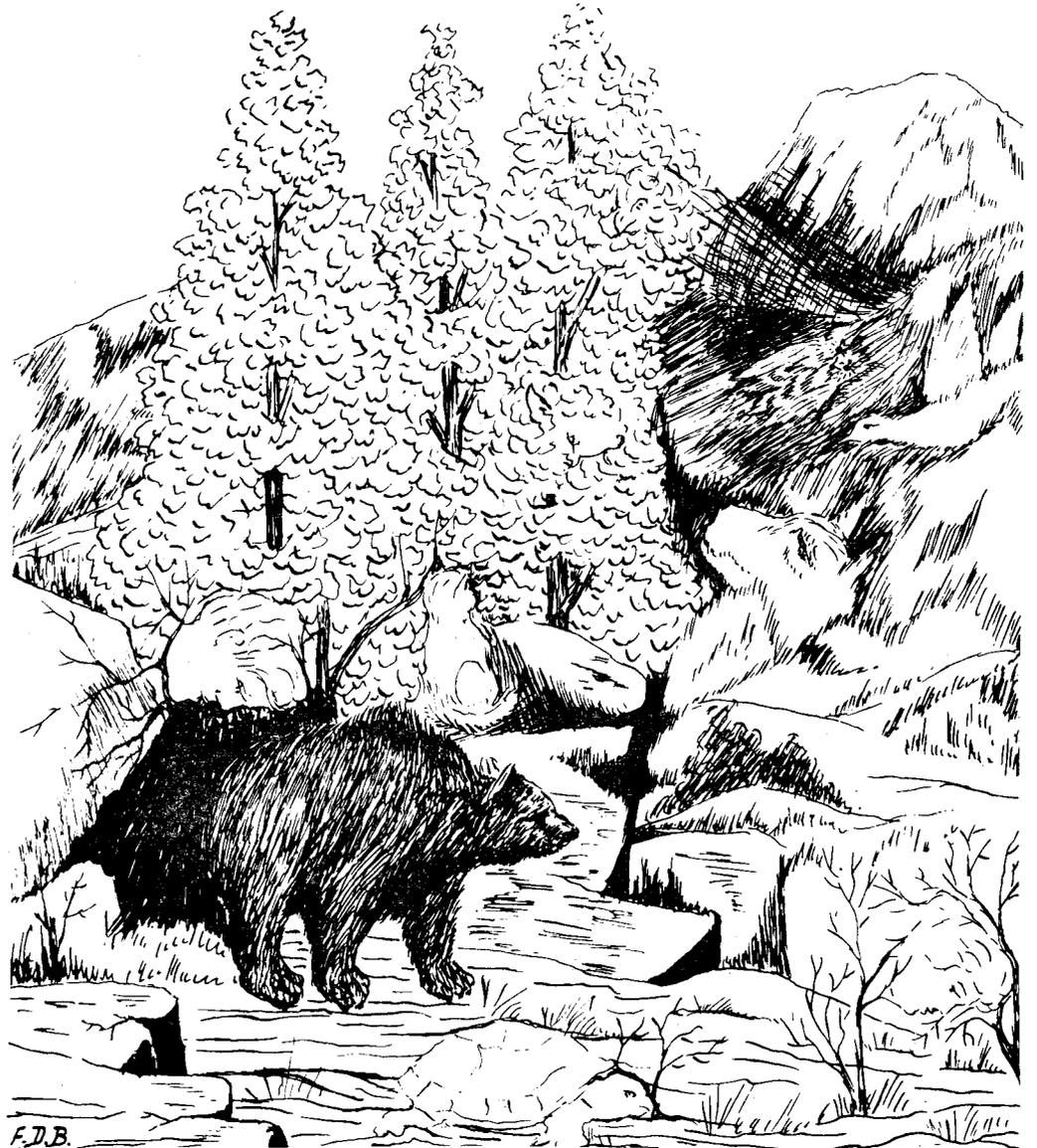
おも
ちや
ばこ



数をあて
ましょう

これはひと目だけ見て
数をあてる問題です。上
の図を見てください。そ
れでは次の3つの質問に
教えてください。線がま
じわっているところに木
を植えようと思います。
全部で、何本植えられま
すか。何列できるでしょ
うか。また1列に何本植
えられますか。

5 3
12 2
25 1
とびつ



さがしましょう

くまがお散歩しようと、穴から出て来ました。「ん？ おかしなにおいがするな。」
何がいるのでしょうか。おうむ、かめ、ねこ、犬、男の人、ひつじ、女の子、ふくろ
う、空をとんでいる鳥がいます。みんなさがせますか？



夢

シブアウ・J・マトゥアウト

1962年に高校を卒業してすぐ、私はハワイのチャーチカレッジに学びました。その2年目に愛する母が他界しました。私は、父が幼ないときに亡くなったために母親っ子で、経済的にも精神的にも、助言を受けるにも、母親に頼りきりでした。母の死を知らされたとき、私は泣きながら天父に祈り、どうしてこんなにひどいことをされたのか、わけを教えてくださいと言いました。私が生きがいにしてきたたったひとりの母を、主はどうして取りあげられたのですか。天父への祈りの中で、私はあなたを恨んでいます、この怒りがと

けるまでは教会に行きませんと言いました。

でも、天父を怒っていたとはいえ、母が心に植えてくれた大切な教えを破ることはできませんでした。母は子供たちに断食と祈りの重要さを教えてくれました。家を離れてチャーチカレッジに来てからも、母はたびたび手紙でその大事な教えを思い出させてくれました。そのために、私は昼夜祈ることや、断食の律法を忠実に守ることを忘れませんでした。

この人生のつらい時期にさしかかったときの私の祈りは、普段と違って

ました。このときに、生まれて初めて肉親の父に話すように真心から天父に話しかけたのでした。しかし、私はまだ怒っているから、この気持ちがおさまるまでは、教会に足を踏み入れないと天父に告げることを、決して忘れませんでした。

それでも私は母から受けた教育と教訓があったので、母が生きていたら許しはしないようなことは、したいとも思いませんでした。でも、日曜日のたびに朝から晩までテレビを見たり昼寝をしたりという生活に、母だったら反対しただろうと、心の中では知ってい



ました。この時期、私の心は行き詰まりの状態でした。そしてとても寂しい気持を味わいました。

そんなある日曜日の晩、私は霊界で伝道が行なわれているということを勉強しました。それを知った私は、その理解と天父への愛から、怒りが涙に変わりました。その夜、私はめったに見ない夢を見ました。夢の中で、レッスンのテキストを手に持ち、大勢の人を前に福音を教えている母をありありと見たのです。夢はまるで現実のようでした。母にかけようとして身を起したほどでした。でも夢からさめると、部屋にいるのはひとりぼっちの自分でした。

何かうながされるように、私はドレッサーの2番目の引出しをあげ、母から受け取った1通の手紙を取り出しました。あかりをつけ、わけあって手紙の2ページ目を読み出しました。読み進むうちに、私は伝道の召しを受け、と書いてある箇所に行きあたりました。母は、教会と主のためなら喜んで何でもしたい、翌年(1964年)の4月に伝道を始めるように言われていると書いていました。その手紙は1963年の年末に書かれたものでした。

母の手紙を読むうちに、ひとつの光が心に射し、しだいに胸に満ちました。その光によって、私ははっきりと理解したのです。母は幕の向こう側で

召しを果たすために、そのためにこの世を去ったのだと。思えば、母が亡くなったのは1964年の4月2日でした。それはちょうど、母が伝道を始めるはずの月でした。

いつしか、私は手紙を手にひざまずいていました。目には涙があふれていました。私は頭を垂れて、光を与えて下さったことを天父に感謝し、これまでの愚かさを許して下さいと祈りました。これからは、どんなことにも御心を行ない、一生主に仕えようと、天父に約束をしたのです。

マトゥアウト姉妹はサモア出身で、現在、教会の翻訳員として働いている。

自分が何者かを知り 自尊心を持つ

大管長
ハロルド・B・リー

愛する兄弟姉妹、そして友人である皆様。私は今、しばしの時をいただき、今日私たちの中で重大な関心事となっているある状況について、一言述べてみたいと思う。私がお話したいことは、今日、非常に数多くの人々の間で、自尊心が驚くほど欠如しているということについてである。これは、人々の服装や行動を見れば明らかであり、また、怒濤の勢いで世界を風靡しつつある寛容という傾向を見ても明らかである。

教会員の中においてさえ、高潔な標準を捨て、由緒正しい言い伝えの真髄を理解しない傾向が見られる。だが、このような言い伝えは、時の始め以来、私たちの先祖にとっては真に意味あるものだったのであり、また、今日に至るまで、人格を高め、世界にあっては義と調和と一致と平和とを推進してきたものなのである。

永遠の言い伝え、永遠の言葉というものは確かに存在するのであり、それはもし正しく理解され、教えられ、実践されたならば、老若男女を問わず、かつてこの世に生を受け、現に生を受け、またこの後生を受ける人々に皆、救いをもたらすものなのである。

美德、貞潔、正直、道徳、信仰、人格などといったテーマで話をするのはいささか時代遅れであると感ずる人がいるかもしれない。だが、これらの諸徳こそ、これまで偉大な人々を築き上げてきたものであり、また人がこの世においては幸福を得、来たるべき世において永遠の喜びを得るための道を指し示してくれるものなのである。またこれらの諸徳を人生の錨としてこそ、種々の試練、悲劇、悪疫に立ち向かう



ことができ、また悲惨な戦争やそれに伴う恐ろしいまでの破滅、飢餓、そして流血にも耐えることができるのである。

こうした諸原則を懸命に教えようとしている人々の警告に注意を払おうとせず、それと正反対の道を進もうとしている人々に申し上げたい。そのような人々は、結局は自分がみじめな状態にいることに気づくことであろう。そのような有様を、私たちは周囲でたびたび見聞きしている。予言者イザヤはそうした悲惨な結果を極めて劇的に描写し、自分に啓示された神の御言葉を再三再四述べた。その言葉は、イザヤがイスラエルの民を強め、世の悪に対抗することができるようにと願ったとき、与えられたものであった。そのイザヤの言葉を引用してみよう。

「『遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、わたしは彼をいやそう』と主は言われる。しかし悪しき者は波の荒い海のような。静まることができないうで、その水はついに泥と汚物とを出

す。わが神は言われる、『よこしまな者には平安がない』と。』(イザヤ57:19-21)

ほかにも多くの予言者が同様なことを述べている。その言葉は力強く、誤解の余地がない。すなわち、「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」(アルマ41:10)

ここで予言者イザヤが劇的に描き出しているような道を選び取る人々がいるのであるが、なぜそのような道を選ぶのか、私はその理由を深く考えてみた。イザヤは、平安を与えてくれるはずの道に背を向ける人々は、荒れ狂う海のようなものであり、その水は泥と汚物とを出す、と述べている。その結果、私はこれらのことは皆、個人が自尊心を持たずにいることに原因があるのではないかと思うようになった。

次にあげる知恵にあふれた言葉を十分吟味していただきたい。これらの言葉を残した人々の生涯は十分私たちの模範に足るものであり、またその人々の体験は、その時代の現実を十分に踏まえたものである。

「自尊心——あらゆる美德の基石」
(ジョン・フレデリック・ウィリアム・ハーシェル卿)

また、次のように言った人もいる。

「自尊心とは、人が自らまとうことのできる最も気高い衣であり、最も精神を高揚し、靈感を与えることのできる感情である。」(サミュエル・スマイルズ²⁾)

「人は皆、自分で自分にその価値を刻印している。私たちが自らに課するチャレンジの値は、他の人々から与えられる。人は皆、自らの意志によってその価値を決めるのである。」(ヨハン

・フォン・シラー³⁾

私の家の近くに住むある美しい母親が、私に次のような手紙をくれた。「私は祖国を愛しております。また、夫を、子供たちを、そして神様を愛しております。どうしてこんなことができるのでしょうか。それは、ひとえに私が自分を真底愛しているからにほかならないのです。」

これが、自尊心のもたらす実であ

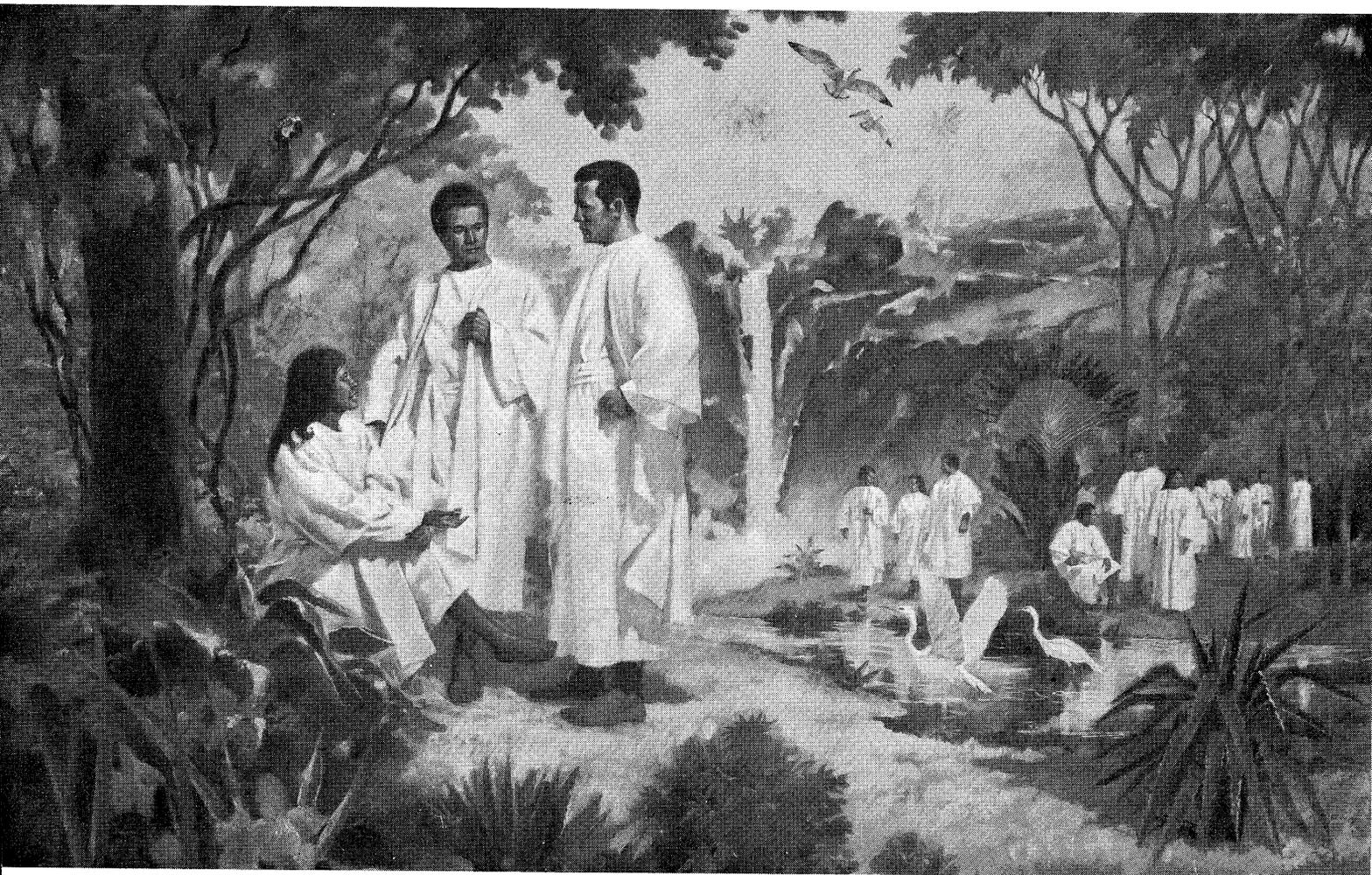
「あなたたちは一体何者なのか。」あなたたちは皆、神の息子、娘なのである。あなたたちの霊は、この世があるに先立って、組織された英智として創造され、生活していたのである。

る。逆に、この姉妹が述べたような、自分を愛する気持を持たなかったならば、全く逆の結果が起こってくることになる。このような人は、生命を愛することをしなくなる。また、たとえ結婚しても、妻や子供たちを愛する気持を失い、やがて家庭を愛さなくなり、自分の故国に敬意を払わなくなってしまふ。そして遂には神を愛する気持をも失ってしまうのである。国内での反乱、家庭内での無秩序と愛の欠如、親に対して不従順な子供たち、神との交わりを失うこと、これらは皆、その人が自尊の気持を失ってしまったからにほかならないのである。

私はかつて、ある人々の会合に招待されて演説をしたことがある。その人々は大部分、教会の中で進歩した経験のない人々であった。それは彼らが、

進歩するのに必要な標準に従うことの大切さを理解していなかったからであり、また、そういう望みをも持っていなかったからである。私は今日の説教のテーマに、「自分は何者なのか」というテーマを選んだ。私は、このテーマについて深く思いめぐらし、この責任に備えて神の御言葉を捜し求めているとき、自分が、私たちひとりびとりにとって一番大切なテーマを選んで説教しようとしていることに気づいた。あの会合で演説したときも同じであった。確かに、あの人々の中にもまだ自分が何者であるかに気づかず、その人生を築き上げられるだけの確固たる基盤を持つことができないでいる人々がいたのである。

子供たちのけんか好きや青少年たちの救い難いほどの行状は、肉体的、精



神的才能によっては獲得することのできない種類の注目とか名声を浴びたいという行為と大差ないのである。それゆえ、享楽に疲れ果てた少女とか、だらしない姿形の少年といったものは、浅薄な装飾や異常な行動（奇をてらった方法）によって、あの説明しようのない特質を得ようと求めている人々のひとつの姿であることがしばしばである。しかも、そのような少年少女は、その特質を魅力と考えている始末である。そのような特質を得ようとする行動は、注目を集めようとする愚かな試みであって、確かに心の中に巢食う欲求不満の表われなのである。これも皆自分の人間としての本質を理解していないためである。

では、「自分は何者なのか」という質問を考えてみよう。この大切なことを理解できないでいる人々がおり、また、その結果、自分を大いに尊ぶことができないでいる人々も何人かはいらる。その質問の大切さを理解しさえすれば、自分を尊ぶこともできたのであろうが、とどのつまり、そうした人々は自尊心に欠けているのである。

私は、今その質問に答えるにあたって、聖典からふたつの質問を提示してから始めたいと思う。この聖句には、だれでも心を打たれるものと思う。

詩篇の作者は次のように言っている。「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。ただ少しく人を神よりも低く造って、榮えと誉とをこうむらせ……ました。」（詩篇8：4、5）

そして次の聖句は、主がヨブに尋ねた質問である。「わたしが地の基をすえた時、どこにいたか。もしあなたが知っているなら言え。……かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった。」（ヨブ38：4—7）

聖典から引用したこのふたつの質問をもっと簡単な言葉で言い換えてみよう。この引用聖句では、予言者は、私たち一人一人に次のように尋ねている。それは「あなたはどこから来たの

か。そして、なぜここにいるのか」ということである。

偉大な心理学者であったマクドガル⁴は、かつて次のように言った。「道徳の刷新を助ける上で最初になければならないことは、可能なことなら、人の自尊心を回復することである。」また、古代のイギリスの職工の次のような祈りを思い出す。「神よ、私が自分を心から信頼することができるよう助けをお与え下さい。」これは万人の祈りでもある。私の言う自尊心とは、異常なまでに発達して高慢やうぬぼれやごうまんに変わるような自尊心ではなく、義しい意味での自尊心である。それは次のように定義されるであろう。「自分自身の価値に対する信頼、また神の価値を認め、人の価値を認める自分に対する信頼。」

ではここで、今までのふたつの質問の答えについて考えてみよう。この答えは、道を踏みはずしていた人々の心に、そして、この混沌とした世の中でまだ自分の真の価値を認識するに至っていない人々の心に火をともし、はっきりと認識させてくれるに違いない。私に与えられた時間が限られているため、私は多少なりとも、私の声がこのひどく荒廃した世界を遠く隅々にまで行き渡るよう切に願っている。

使徒パウロは次のように述べている。「その上、肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、霊の父に服従して、真に生きるべきではないか。」（欽定訳ヘブル12：9）

この聖句は、この地上に住み、この地上に父親のある者には皆、同様に霊の父もおられるということを言っている。モーセにしても、アロンにしても同様であった。彼らふたりは、ひれ伏して次のように叫んだ。「神よ、すべての肉なる者の霊の神よ、このひとりの人が、罪を犯したからといって、あなたは全会衆に対して怒られるのですか。」（欽定訳民数16：22）

ふたりが主に向かってどのように叫んだのか、注目していただきたい。ふたりは「すべての肉なる者（全人類）

の霊の神（父）」と叫んだのである。

アブラハムを通じて与えられた啓示から、この霊が何者であり、どのようなものなのか、若干ではあるが知ることができる。

「さて、主はわれアブラハムに、この世に先だちて組織されたる英智たちを見せたまいたりき。而して、これらすべてのものの中には、高貴にして偉大なるもの多くありたり。

神、これらの霊を善しと見たまい、これらの霊の中に立ちて言いたまえり、これらの者をわが統治者となさん。神、霊、なりしこれらの者の中に立ちてこれを善しと見たまいたればなり。而して、神われに言いたまいけるは、アブラハムよ、汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり、と。」（アブラハム3：22、23）

次の聖句では、主の約束が記されている。前世で忠実であった人々は、さらにつけ加えられて、第二の位であるこの現世で骨肉の体を得るという約束である。また、神が啓示によって教えられたままの戒めを守るならば、その人々は、「とこしえに栄光をその頭に付け加えられん」（アブラハム3：26）と約束されている。

このふたつの聖句の中には、極めて重要な真理が含まれている。まずその第一は、霊とは何であるかということが、私たちの骨肉の体と関連づけて定義してある、ということである。霊は前世ではどのような姿形をしていたのか。（無論、霊と死すべき体とを分離して見ることができればの話であるが。）末日の予言者は、靈感を受けて次のように答えている。

「……霊界のものはこの世のもの象にして、この世のものは霊界のもの象なればなり。すなわち、人間の霊は人の身体象にして、また神の造りたまひしあらゆる獣およびその他の生物の霊も皆かくの如きを誌せしなり。」（教義と聖約77：2）

さらに前述の聖句から知ることのできる第二の真理は、ここに集っておられる人々は皆、前世で霊の状態であり、現在骨肉の体を持っているわけである

が、同時にまた、かつて第一の試しを無事通過した仲間であり、この地上に来て骨肉の体を受ける特権を授けられた者たちである、ということである。もしその試しを通過していなかったならば、現在、骨肉の体を受けてここに集ってはいないであろう。それどころか、その特権を拒まれて、前世で、骨肉の体を受ける特権を奪われたあの三分の一の霊たちと同様、後にサタンとして知られるようになったルシフェルに従っていたことであろう。その三分の一の霊たちは、現在私たちと共にいるが、単なる霊の存在である。私たちは皆、救いの計画に従いさえすれば、私たちに生命を与えて下さった父なる神のみもとへ帰り、偉大な栄光を受けることができる。だが彼らは、その救いの計画を妨げようとして一層攻撃を新たにしているのである。

旧約の予言者は、死について次のように述べた。「ちり（つまり、骨肉の体）は、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る。」（伝道12：7）

私たちががっていたことのない場所へ帰ることができないのは当然のことである。つまりここでは死も誕生同様ひとつの奇跡的な過程であると言っているのである。この死によって、私たちは、主が弟子たちに教えられた祈りのような「天にいますわれらの父」のみもとへ帰るのである。

前述の聖句（アブラハム3：22, 23）の中には、ほかにも真理が明確に述べられている。それは、アブラハムと同じ様に、多くの人々が生まれる前から選ばれていたということである。同様のことを、主はモーセにもエレミヤにも語っておられる。この教えを、末日の予言者、ジョセフ・スミスは一層明確なものにした。ジョセフ・スミスは次のように宣言した。「私は、神の王国において重要な働きをなすよう召されている人々は皆、この世に先立ってその職に召され、また予任されていたものと信じている。」さらに次のように言い添えた。「私は、自分が現在召されている職を果たすよう予任されていたと信じている。」（*Documentary*

History of the Church 「教会歴史」第6巻P. 364参照）

だが同時に警告も発せられている。今述べた聖句の中で言われている「予任」という召しにもかかわらず、次のような靈感に満ちた宣言もある。「見よ、召さるる者は多けれども選ばれる者は少し……」（教義と聖句121：34）

この聖句で述べられていることは、たとえこの現世で自由意志を持っているとしても、この世に先立って、現世のために自らのなした備え以上の大いなる召しに予任された人々が大勢いるということである。また、高貴にして偉大なる霊がおり、御父はその中から指導者を選び出されたのであるが、たとえかつてその高貴にして偉大なる霊のひとりであったとしても、この現世で、予任された召しを全うできないこともあるかもしれない。それについて主は次のように尋ねておられる。「…選ばれることなきは、これそもそも何の故ぞ。」（教義と聖約121：34）

ふたつの答えが与えられた。まず第一に、「人々の心甚しくこの世に属けるものの上にあるためであり、第二に「唯々人間の誉を得ることをのみ望」んでいるからである。（教義と聖約121：35）

ではここで、私がこれまで読んできたことを要約するために、もう一度、あなたたち一人一人に尋ねてみたいと思う。「あなたたちは一体何者なのか。」あなたたちは皆、神の息子、娘なのである。あなたたちの霊は、この世があるに先立って、組織された英智として創造され、生活していたのである。そして、骨肉を受ける前の状態で、ある戒めに従順であったため、骨肉の体を授かるという祝福を受けたのである。こうしてあなたたちは現在の家族の中に生を受け、現在住む国々に生まれ落ちたあなたがたは、この地上に来る前の生活の報いとして、歴史の一時期にこうして生を受けたのである。これは使徒パウロがアテネで群衆に教えたように、また、主がモーセに啓示されたように、この世が創造される以前に生きていた人々一人一人の忠実さに応じ

て決定されたことである。

ここで、使徒パウロの説いた、「知られない神」についてのあの力強い説教にある意味深い言葉をもう一度聞いていただきたい。使徒パウロは、石や真鍮や木の像を知らずに拜んでいる人々に向かって次のように説教した。今、その箇所を引用してみよう。

「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。

また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ（この点に注目していただきたい）、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。

こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見い出せるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりひとりから遠く離れておいでになるのではない。」（使徒17：24, 26, 27）

次にあげる聖句は、やはり主がモーセに宣言されたもので、私たちの理解の眼を一層明らかにしてくれるものである。申命記に次のように記録されている。

「いと高き者はアダムの子らを分け、諸国民にその嗣業を与えられたとき、イスラエルの子らの数に照して、もろもろの民の境を定められた。」（欽定訳申命32：8）

この聖句が述べられたのは、イスラエルの子らとその嗣業の地である「約束の地」に到達する以前のことであったことを心に留めていただきたい。

次の聖句にも注目していただきたい。「主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。」（申命32：9）

この聖句を聞き、後にイスラエルと呼ばれるようになるヤコブの血統に生まれたということ、また後にイスラエルの子らとして知られるようになったそのヤコブの子孫として生まれたということは、この地上に生を受けた人々の中でも最も傑出した血統に生まれたことになる、ということが非常に明確

になったことと思われる。

こうした報いは皆、恐らくはこの世があるに先立って約束され、予任されていたのであろう。無論、そのような一連の出来事は、私たちがあの前世の霊界でどのような生活をおくっていたかによって決められたことに違いない。このような臆説に疑問をさしはさむ人があるかもしれない。だが、そのような人も、私たちがこの世を去って裁きを受けるときにはこの地上で人として生活していた間の行ないによってひとり残らず裁かれる、という教義は何ら疑うことなく受け入れることができるはずである。それならば、私たちが今この地上の生活で受けていることは、この地上に来る前の所業に応じて一人一人に与えられたものである、と信ずることは、全く理にかなったことではないだろうか。次に、ほかに聖典の教えを通じて理解していただきたい大切なことがある。私たちは皆、自由意志を持つ存在である。こう言うとき邪心のある人々は、自分のしたいことは何でもできる自由があるんだ、という意味にとるかもしれない。だが、このような解釈は予言者の言う自由意志の意味とは全く異なる。予言者たちは聖典の中で、自由意志を次のように定義している。その箇所を引用してみよう。

「それであるから、人はみな現世に於て自由であり、およそ人間のためになるものは何でも与えられる。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか、または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから、その束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか、これは全く人間の自由である。」(Ⅱニーフアイ2:27)

使徒パウロは、私たちの肉体の神聖さを、次のような言葉で印象的に述べた。「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿していることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」(Ⅰコリント

3:16, 17)

そしてさらにパウロは、バプテスマを受けた教会員たちには聖霊という特別の賜が授けられていることを説明し次のように教えた。「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。……それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。」(Ⅰコリント6:19, 20)

人々がこの聖句の御言葉の真の意味を考えようとするとき、あの高名な心理学者マクドガルの言葉の深遠な意味を理解し始めるのである。もう一度引用しよう。「道徳の刷新を助ける上で最初になければならないことは、可

「もし私たちが、……神との神聖な関係をはっきりと……感じ取るならばその結果には、極めて大きな差が生まれることであろう。」

能なことなら、人の自尊心を回復することである。」自尊心を回復するに際して、前述の「自分は何者なのか」という質問の答えを完全に理解できるような人々を助けること以上によい方法があるだろうか。

私たちは、自尊心を失った人の姿を時折目にする。人が自尊心を失っていることは、その行動、外観、話し振りを見れば明らかであり、また、品位のかけらも保とうとしていないことからわかる。こうして私たちが目撃する光景こそ、サタンに勝利を許した人々の悲惨な姿なのである。主は、サタンの業について次のように言われた。「……人を欺きだまし、……欲するままに虜となすなり。」(モーセ1:1-4参照)これが、「わが声に聴き従わぬすべての者」(モーセ4:4)の末路である。主がこのようにモーセに宣言されたのである。

数年前、私はある研究論文を読む機会があった。その論文は、数人の牧師

が、自殺した学生の様々な状況について追跡調査したものである。そしてこの論文では、徹底的な調査研究の末、結論として次のように断言している。

「自らの命を断った学生たちの考え方には、余りにも信念がなすぎすぎる。そのため、人生の重大危機に直面しても彼らには何ら確固たるものがなかったわけである。こうして、彼らは、臆病者のとる方法をとってしまったのである。」

このような状態は、主が山上の垂訓の結びに述べられたたとえ話に描かれている悲惨な状況と酷似している。

「また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。」

雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」(マタイ7:26, 27)

主は、救いの計画における永遠の目的を、次のようにモーセに宣言された。「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1:39)

この永遠の計画における最初の目標は、私たち一人一人が地上に来て、骨肉の体を得ることであった。だが、死とそれに続く復活の後、霊と復活体とは、二度と死の束縛を受けることがなくなるのである。これは、あらゆる人々に与えられる無条件の賜である。パウロは次のように宣言している。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」(Ⅰコリント15:22)

不治の病で死んでゆく者、そして子供に先立たれた母親にとって、この聖句がどのような意味を持つのか、ということは、次の話からよく理解できるものと思う。数年前、私と病院で会ったある若い母親の言った言葉である。「私はこの聖句について長い間、深く考えてきました。そして、私は、今死のうが、70歳、80歳、90歳まで生き延びようが、大きな違いはない、という

ことに気付きました。私が活発に働き永遠の喜びに通じる業を行なうことのできる場所へ早く行くことができればそれだけ、関係者にとって望ましいことなのです。」この母親は、自分が神のみもとに行くにふさわしい生活をしてきたと考えて、心に慰めを得たのである。神のみもとに行くことこそ、永遠の生命を享受することなのである。

それゆえ、この地上で私たち一人一人に与えられた貴重な時間を、1分たりとも無駄にせず有効に使うことは、極めて大切なことである。私は自分自身の家庭に起きたことから、このことを強く心に刻み込む機会があった。ある若い母親が、かわいらしい亜麻色の髪をした6歳の娘を祖母のもとへ連れて来た。母親は私たちに、娘がプライマリーのクラスで習ってきたばかりの美しく、新しい子供の歌を聞いてもらえないか、と尋ねた。その母親が伴奏をし、かわいい娘は歌い出した。

「神の子です 私やあなた
いろいろなお恵み 感謝します

神の子です 私やあなた
御言葉正しくわかるように

神の子です 私やあなた
みこころ行ない また天に住む

(コーラス)

私を助けて 導いて
いつかみもとへ 行けるように。」
(子供の歌B-76)

これを聞いていた祖母は、涙を流していた。このとき、祖父母は何も気づいてはいなかった。その母親は、かわいい娘に、天の家へ帰るに必要なことがらを十分教える機会を持たずに間もなく死の訪れを受けるはずであったのである。この無常の人生の間中、「私を助けて導いて」という子供の切なる祈りに答えてやる責任を、他の人々に委ねるほかなかったのである。

もし私たちが、天父なる神との神聖な関係をはっきりと感じ取り、また救い主にして長兄であるイエス・キリストとの関係、さらには、私たちお互い

の間の関係を感じ取るならば、その結果には、極めて大きな差が生まれることであろう。

私が病院で会ったあの素晴らしい姉妹にもたらされた莊厳とも言える心の平安とは対照的に、死が近づいてもその大きな慰めを得ることのできない人々の恐ろしい有様を、主は次のように簡明な言葉で述べられた。「また、われにあらずして死ぬる者は禍なるかな。そは、死は彼らにとりて苦ければなり。」(教義と聖約42:47)

次のように言ったのは、ジョージ・バーナード・ショー⁵であった。「もし私たちが皆、自分たちは同じひとりの子供なんだ、ということを知り合えば、今のようにお互いのしり合うこともなくなるであろう。」

「……この世に先立って、現世のために自らのなした備え以上の大いなる召しに予任された人々が大勢いる……。」

この説教を終えるにあたって、私はあなたたち一人一人が、そしてかつてこのような勧告を耳にしたことがなかった人々が、何か心の中に穏やかな気持が湧き上がるのを感じ、さらに、自分は何者であるのか、どこから来たのかということを考える糸口でも与えることができたものと信じている。そしてまた、そのように考えた後、今から一層自尊心を高め、天来の霊の住む神の宮、すなわち自分の肉体に敬意を払い始める決心が心の中で脈々と湧き起こるよう、心から望んでいる。私があるあなたたちに勧めることは、プライマリーで子供たちに教える歌のように、「神の子です。私やあなた」と再三再四、常々、心の中で自分に言い聞かせていて欲しいということである。そして、その理想に一歩でも近づいた生活を、今日、始めていただきたい。この理想に従えば、自分が何者かを常にはっきりと自覚することができる。従って人生は、もっと幸福で、豊かなものとなることであろう。

神よ、願わくば、今日ここに集う人々が皆、尋常の人間としての私たち幹部ではなく、神のみもとから来る神聖なものに目を向けた生活をおくることができるよう。人の進むべき道を踏み誤った人々の行末を考えると、その人々が心に強い決心をして、一步一步着実に、永遠の生命という大いなる目標に向かって歩いてくれるよう、切に祈っている。また私自身も、模範と言葉とによって、私のできる限り最上のものを人々に示して、私の務めを果たしたいと、心から祈っている。

私はここに再び、悲しみにくれていたマルタに主が言われた、あの深遠な御言葉が真実であることを慎んで証する。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとひ死んでも生きる。」(ヨハネ11:25)

私もまた、みたまの導きのままに心底から証を述べたあのマルタと同じ気持をもって証できることを神に感謝する。

「主よ、信じます。(私もまた)あなたが、この世に(来られた)キリスト、神の御子であると信じております。」(ヨハネ11:27参照)

世の救い主にしてキリストなる、主イエスのみ名により申し上げる。アーメン。

1. ジョン・フレデリック・ウイリアム・ハーシェル卿 (1792—1871) 英国の科学者。
2. サミュエル・スマイルズ (1812—1904) スコットランドの伝記作家。
3. ヨハン・フォン・シラー (1759—1805) ドイツの詩人、劇作家、批評家。
4. マクドガル (1871—1938) アメリカに帰化した英国人。
5. ジョージ・バーナード・ショー (1856—1950) アイルランドの劇作家、批評家。

最も大いなる誉れ

女性の役割

第一副管長

N・エルドン・タナー

私は今朝、全世界の皆様方に、イエスがキリストであり生ける神の御子であられることを、また私たち全人類のために自らの命を供すべくこの地上に来られたことを証申し上げたい。イエスは生命と救いの計画を示されたが、十字架上ではりつけに処せられた。しかし、その主の復活により私たちは永遠の生命を享受することができるのである。神の予言者は常に迫害され、多くの者は主の御言葉を教えているときに命を奪われている。このことは心から真剣に思いめぐらしてみなければならぬことではなからうか。

また私は、主の教会が、完全な福音と共に主により選ばれたひとりの予言者を通してこの地上に回復されたことを証申し上げたい。またイエス・キリストの教会が今日この地上に存在すること、そしてイエスが、生ける予言者ハロルド・B・リーを通してその教会を導いておられることを皆様に証する。私は世界中いたるところにいる人々が、全人類の救いのためにその予言者の声をもって語られる主の言葉に耳を傾けるよう、切に求めたいと思う。だれもこれを無視したり、嘲笑したり、論破したりしてはならないのである。

きょう私はこの教会における女性の役割についてお話をしたい。教会には、主の御業と同胞への奉仕に携わる妻、母、独身女性からなるすばらしい女性たちがいる。彼女たちは、婦人の主た



る組織である扶助協会や、子供たちが学ぶ初等協会や、全教会員が福音を学ぶ日曜学校や、青少年、成人が活動を行ない交流を深めるMIA、ミューチュアル・インタレスト、その他さまざまな場において、献身的に立派な奉仕を行なっている。

先日、数人の人と事務的な話をしたあとで、くだけた個人的な話になり、ある人がこう言った。「私の妻は世界一すばらしい妻ですよ。」すると別の人が言った。「それはあなたのお考えで、私は自分の妻が最高だと思いますよ。」そして3番目の人はこう言った。「大きな祝福ではないですか。相愛の妻がいる。それも良い母親で、良い主婦で、高い理想を持って、神様を信じて、自分の家族がイエス・キリストの福音の教えに従うように、助けてくれる。」

女性にとって、夫から愛と感謝のこのような賛辞を受けること以上に、大きな名誉があるだろうか。神に認められ、最も身近な最愛の人々の口から愛と感謝の言葉を聞くことに比べれば、世の賞賛も尊敬も影は薄く、微々たるものである。

神は時の初めから、女性が特別な存在であることを明確にし、女性の立場義務、神の計画における将来を、非常にはっきりと説明された。パウロは、男は神のかたちであり栄光である。女は男の栄光である。主にあっては女なしには男はないと言った。(Iコリント11:7, 11参照)この大切な協力者という関係において、神のことが述べられているのにお気づきであろう。私たちは、女性の持つ特権、祝福、機会のうちで最大のもののひとつが、神と協力して神の霊の子供を世に送り出すことであることを決して忘れてはならない。

サタンとその群勢が科学論争やふらちな主張を使い、女性を妻として、母として、主婦としての第一の責任からおびき出そうとしていることは、この栄えある教えを理解するすべての人の憂慮のまどである。私たちは、女性解放、女性独立、性の自由化、産児制限、墮胎、その他女性の役割をおとしめる悪らつな主張を非常に多く耳にしているが、それらはすべて、女性は言うに及ばず、社会の根底を成す家庭と家族をも崩壊させようとのサタンの策

略である。

効果ある武器としてラジオ、テレビ、雑誌があり、そこではポルノグラフィが氾濫し、女性が性のシンボルとして、ある人々によれば性の食べ物にされ、いやしめられている。毎日のあからさまな服装や幻覚剤やアルコールが強力な武器となって、徳や純潔や生命までがむしばまれていく。コミュニケーションの手段が近代化し、輸送機関が高速化した現在、そのために世界中で一層多くの人々がさらに多くのことを見聞きし、悪影響が急速に浸透していく。

ポルノグラフィや幻覚剤やアルコールが、驚くべき数にのぼる青少年、成人に使用され、道徳観をくつつがえさらにはこの悪魔の策略に負ける人々の精神や心を退廃させている。

ブリガム・ヤング大学のダリン・オークス学長は最近同大学の全学生にこう語った。「私たちのまわりには、不義の性関係を唱道する文学が、印刷物や映画の中に氾濫している。あなたがた自身のために、それを避けなさい。ポルノグラフィや猥せつな本や写真は、汚れた食物よりもまだ悪い。身体には良くない食べ物を排泄する作用が働くが、頭脳は悪いものを吐き出しはしない。いったん記憶されると、それはいつも記憶の底にあって、邪な考えが脳裏に浮かび、人生の健全な物事からあなたをそらしていくのである。」

教会の若い女性がそのような汚れに染まらずにいることは非常に大切である。きょうの少女はあすの婦人である。少女たちが女性の役割について備えをなすことが必要である。もし現在、少女たちが家庭で貞節を教わらず道徳的に墮落して、またもしその子供たちが、結婚の神聖な律法に基づいて聖められた家庭の中で育たなかったならば、世

の中ははたしてどのようになるか想像できるだろうか。

結婚は神によって定められた。それゆえに私たちはあらゆる機会を捕えて結婚の絆を強め、家庭を強め、身を修めて模範により子供たちに神の道を教えなくてはならない。これこそ、この世でも来たるべき永遠の世でも幸福を見出すための唯一の方法である。

女性には、妻、母、主婦、姉妹、良き隣人として数々の義務と責任がある。一方多くの女性が才能、興味、創造性、献身、活力、技能などを家庭外に求めているが、実はこれら女性の責任はすべてそれらの必要を満たし得るのである。女性がそれらの役割の中で及ぼす良い影響をはかり知ることとはとうてい不可能である。女性の持つ大事な責任をこれからあげてみようと思う。

まず何よりも、先ほど述べたように、女性は神と協力して霊の子供たちをこの世に迎える人である。これは何とすばらしいことであろうか！これにまさる榮譽はない。その榮譽に伴って、子供を愛し、育て、市民としての責任と天父のみもとへ帰るための道を教えるという非常な責任が課せられるのである。子供たちは、イエス・キリストの福音とイエス・キリストの教えを受け入れ、守ることを、教わって理解しなくてはならない。彼らが人生の目的を知り、なぜこの地上にいるのか、死後どうなるのかを知るならば、正義を選び、サタン誘惑と攻撃とを避ける分別を持つことであろう。サタンは実在し、彼らを滅ぼそうと機を伺っている。

子供にだれよりも大きな影響を及ぼすのはその母親である。母親は、自分の言葉と行ないと受け答えと態度のすべて、外見と服装までが、子供たちや

家族の生活に影響を与えることを承知すべきである。子供が態度や希望や将来の人生と社会に対する貢献を左右する信念を、母親から学び取るのは、家庭にいる時である。

ブリガム・ヤング大管長は、母親は神の御手によって働く器であり、男性の全身全霊に力を吹き込み、人と国の現在、将来を導く道具であるとの考えを述べた。彼はさらに言った。「どの国の母親にも、子供にいきかいをしないように教えさせなさい。そうすれば子供たちは、成長したあかつきに戦争を始めるようなことはしないだろう。」
(Discourses of Brigham Young
「ブリガム・ヤング説教集」〔英文〕
P. 199)

主なる神が「人がひとりているのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」と言われた時、主は文字通りそれを意図して、アダムにイブを与えられた。(創世2:18) 私たちは、男は父母のもとを離れて妻と結びあい、ふたり一体となるべきであると教えられている。夫婦間の関係がこのように説明されているのである。(創世2:24) 立派な男性のかげには必ず立派な女性がいると言われているが、経験から見ると、それはおおむねあっている。

会社の幹部が社員を雇い入れたり、新事業のために経験者を募集する際に必ずその妻について情報を求めようとするが、これは興味あることである。これは実に大切なことと思われる。教会で男性が新しい神権の職を受けようという時、妻が正しい生活を送っているか、夫に全幅の支持を寄せられるかどうかについて必ず考慮される。

女性の皆様、あなたがたは日常、男性の大きな力となり、支えとなっている。男性は力の及ばない時にあなたが



RANE

たの援助を必要とすることがある。自分の母や恋人や妻が自分を信頼し、愛していると知ること以上の励ましや希望や力はない。そのような時、男性は毎日その愛と信頼に応えようと努力するであろう。

ヒュー・B・ブラウン長老はある時、扶助協会の大会でこのように語った。「女性は男性に劣ると言いたがる人々がいるが、私はそうは思わない。体力的には劣るかもしれないが、靈的、道徳的、宗教的、また信仰において、福音に真実改宗した女性にどの男性が匹敵しようか。女性は男性よりも犠牲心に富み、辛抱強く苦しみに耐え、熱心に祈る。快活さ、善良さ、道徳性、信仰において、女性は男性と互角か、時には男性をしのぐ。」(扶助協会1965年9月26日)

若い女性の皆様、兄弟や恋人に及ぼす自分の影響を軽く見ないように。あなたがたが彼らの愛と尊敬に価する生活をする時、それは、彼らが清く、徳高く、成功して幸福になろうとする大きな助けとなるのである。人気よりも尊敬によってこそ、人生の妙味を会得できることを、いつも忘れてはならない。先日私は、ベトナム戦争で捕虜となったふたりの青年の会話を本で読んだ。ひとり、「戦争も爆撃機も殺りくも捕虜収容所も、何もかもみんないやだ」と言った。

するともうひとは、「本当にその通りだ。しかし故郷には帰りを祈ってくれるガールフレンドがいる。彼女はほくのことを心配してくれる。彼女のおかげで、殺ばつなことにも耐えられるんだ」と言った。

母たち、娘たち、そしてすべての女性たちに特に申し上げたい。あなたがたには、私たちの生活に良い影響を及ぼす力と大きな可能性がある。サタン

があなたがたを滅ぼそうとねらっているのは、正にその理由によるのである。サタンに妥協してはならない。あなたがたは主の願い通りに正しく清い生活をしようという決意と希望と、勇気と力を持たなくてはならない。若い女性の皆様、徳高く、身を清く保ちなさい。清い生活をする立派な青年にふさわしい者となり、共に主の宮居に行つて今も永世にも結婚の聖なる絆に結び固められ、神が喜んで靈の子供たちを送られる良い家庭を築けるように。そうした時に、自分の模範に従えば幸福と永遠の進歩を得られると確信して、胸を張つて子供たちの前に立てるであろう。子供たちはその遺産を受け継ぐ権利がある。あなたがたがそのような生活をして、尊い財産を子供たちに伝えることができるように、へりくだつて祈るしだいである。

地球創造の究極の目的は、神の靈の子供たちが肉体をまもつて生活し、第二の位を保つて救いと昇栄の用意をする場所を作ることであつた。イエス・キリストの使命の究極の目的は、人に不死不滅と永遠の生命をもたらすことであつた。父たる者、母たる者が究極の目的とするところは、その祝福にふさわしい生活をして、父なる神と御子イエス・キリストの御業を援助することではなならない。その神の計画を手伝うことは、女性に与えられる最高の榮譽である。断言したい。女性は賢明な母親となつて立派な子供たちを育てることこそ、ほかのどんな職業に見出すよりも大きな喜びと満足を得、人類に対してより大きな貢献をするのである。

主は、私たちがこの神の計画の中で自分の分を果たすならば大きな祝福を与えると約束された。合衆国第31代大統領ハーバート・フーバーはこのよう

に語つた。「ただの一世代でも、子供たちが正しく生まれ、しつけられ、教育された健全な時代があつたなら、何千という政治問題が消え失せたであろう。より健康な精神と活気にあふれた肉体が保証されて、私たちのエネルギーをより高い目的に向けてことができたとであろう。」(デビッド・O・マッケイ大管長「大会報告」より引用、1931年4月〔英文〕P. 79, 80)

この末日にイエス・キリストの建てられた教会があり、そこに神の予言者がいて、人の子らのために神から啓示と指示を受けているとは、何と幸いなことであろうか。私たちは神が感情、感覚、体を有しておられること、また神の属性と個性を知るといふ恵みに浴している。生命と救いの計画を与えられ、この世でも来たるべき永遠の世でも幸福を得るにはどう生きるべきかについて、断えず導きを受けている。また、物的、靈的福祉に關したすべての事柄を教え導く種々の組織がある。

教会の最もすばらしいプログラムのひとつは、週に1回家族全員が共に集う家庭の夕べと呼ばれるプログラムである。月曜日ごとに世界中全教会員の家族が各々家庭に集まり、できれば家長の父親が家族をまとめ、周到に編集されて教会員の各家庭に配布されたテキストを用いて、家族の靈的、物質的な福祉に關する諸問題を話し合っているさまを思いめぐらすと、私の胸は躍るのである。この集まりを定期的に正しく行なうと、家族の一致にとってはかりしれない力となる。それは、これまで私共に寄せられた多くの証が証明している。私はあらゆる家族がこのプログラムを行なうようにお勧めしたい。このプログラムを実行するならば一致と愛と献身において豊かに祝福され、そしてすばらしい実りを刈ること

ができると私ははっきりお約束できる。もちろんのこと、毎日家族の祈りと個人の祈りを行なうように、この夕べに家族の祈りを捧げることが大切である。

夫が宗教を実践して神権の召しを全力を尽くして遂行し、妻が手立てを尽くして夫を支える、愛と一致のある家庭、天父の御前に連れ帰るべく正しい息子、娘を育てようと、夫婦が一致して努力する家庭ほどにうるわしいものを、私は思い浮かべることができない。これは実現不可能な夢のように聞こえるかもしれない。しかし、この教会にそのような家族がたくさんあることを、そしてイエス・キリストの教えを受け入れ、教えに従うならば、だれにでもそれが現実となり得ることを断言できる。そのような家庭に育つ子供はいかに幸せであろうか。そのような子供たちを持つ親の喜びはいかに大きいであろうか。

繰り返し申し上げる。サタンは、私たちが神の戒めを守って全き喜びを得るのを妨げようとしている。決して忘れてはならない。また、子供たちにそれを教えずにはならぬ。サタンは実在して、私たちが滅ぼそうとしているのである。サタンは家族の一致の重要なこと、大切なことを承知している。サタンは、これまでの文脈のすべてが家族生活いかにによって存続あるいは衰退してきたことを承知している。私たちがイエス・キリストの福音の原則を守り、子供たちにもそれを教えることによって、家庭をサタンから守ることができる。そのようにすれば、必ずや迫り来る誘惑を撃退することができるのである。

若い女性の皆様、良い教育を受けて知恵と知識を得、母親の責任を引き受ける用意をされるように。私たちは、

神の栄えは英智であると教えている。従って、私たちは皆周囲の事態に目を向けて、私たちからすばらしい将来を奪おうとするサタンを阻止する用意をしないでなければならない。知識と知恵と決断と、私たちが助ける主のみたまによって、それができるのである。

私たちはまた、女性も社会的行事や教会の補助組織活動に活発に参加すべきであると信じるが、それでもなお、家庭と子供を優先すべきこと、決しておろそかにしてはならないことを常に心する必要がある。母親は、子供を愛し、子供のために思い、子供の一举一動を心にかけていることを、子供たちに感じさせなくてはならない。これはほかのだれにもまかせられないことである。母親の世話と愛を十分に受ける子供が母親の愛を受けられない子供や別の人のそばで育つよりもあらゆる面で進歩の早いことは、数々の実験や研究で証明されている。

父親たちもまた、自分の役割と責任を引き受けなくてはならない。子供には両親が必要である。家庭内で、父親は母親と共に子供たちを育てることに伴う義務を果たし、年長の子供を正しくしつけ、問題がある子供や助言と指導を求める子供の良き聞き手となるべきである。愛によって、子供たちと良い関係を築き、心を通わせる道をつけなさい。

すべての夫、父親、息子、兄弟たちにお勧めしたい。抱いている大きな愛と尊敬を実際に表わし、私たちの妻、母、娘、姉妹、恋人である人々にふさわしくなろうと努力しなさい。女性に対して尊敬に欠ける行為を見せたり、女性をいやしめる言動をとることは、何よりもその男性の人格の貧しさと礼儀のなさを示すものである。夫や父たる人々が独裁者となって、妻より優れ

ているという態度を何かの形ででもとることは、キリスト教徒らしくない神の不興を呼ぶ不当なやり方である。

リー大管長はドイツのミュンヘンで開かれた地区総大会でこう語った。

「もしあなたがた夫が、主の御業の中で自分にできる一番大事なことが自分の家庭の中にあることを忘れないならば、……家族の絆を固く保ち続けることができる。家族の絆を固くし、子供たちのことを心にかけようと思うならば、家庭という場を、子供たちが混迷と苦悩の時代に必要な錨を下ろす場、愛が豊かに満ちて喜びが増す確固たる場にするのである。」

女性たちが家庭と家族の大切さを認識し、夫と共に神の戒めを守り、生み、ふえ、地に満ちて、自分を愛するように隣り人を愛し、子供たちに祈ること、主の前に正しく歩むことを教える時、彼らの喜びは増し、恵みに恵みが加わってあふれるばかりになるであろう。

これらの恵みは、この生き方を拒む人々の決して知り得ない喜び、すなわち健康で幸せな子孫を得るといふ喜びである。立派に成功し、やがては中心となってまだ生まれ出ない世代のためにより良い世界を作ることのできる子供、そのような子供を育てあげることには、平安と満足がある。再び天父の御前に帰り、「良い忠実な僕よ、よくやった。…主人と一緒に喜んでくれ」（マタイ25：21）と言われるように、従順と愛により、その備えをなしている家族にとって、それは何と喜ばしい特権であり、祝福であろうか。

それが私たちの特権、祝福となることを、イエス・キリストの御名によりお祈り申し上げます。アーメン。

報い、祝福、約束

十二使徒評議員会会長
(現大管長)

スペンサー・W・キンボール

次の話は、合衆国東部で、ある宗教雑誌を主宰しているロイ・H・ステトラー氏の書いたものである。

「リバデアにあるクリミヤ城の外での出来事であった。城は一面にライトが当たって、明るく照り輝いていた。ひとりの兵士が、まるで物差ででも測ったかのように規則正しい歩調で巡視を続け、その城の警備にあたっていた。その城の中では、世界各国から人が集まり、非常に重要な会合が開かれていたのである。その兵士は自分の任務に非常に誇りを感じている様子であった。一体どこの兵士で、自分が三巨頭の集う重要な会合で警備をする任務があったということを、自分の孫子に話してあげたいと思わない者がいるだろうか。

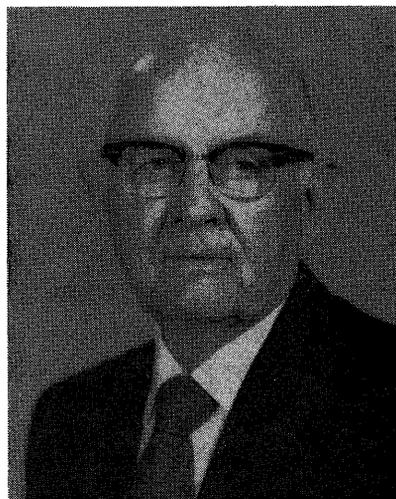
すると突然、まるで幽霊のように、ひとつの人影が現われて、城の入口に通じる道を進んで来た。人影が近づいて来たので、歩哨は大声で叫んだ。

『止まれ！ だれだ。ここへ来て、名を名乗れ。』 こう言うと、歩哨は素早く肩から銃をはずし、緊急事態に備えてさっと構えた。

すると、『この城の中にいる人たちと話したいのですが』という声があった。

『ばかばかしい。』 歩哨は思わず叫んだ。『城内は立入禁止だ。お前は、この中で全世界の将来を決めるために三巨頭が会談していることを知らないのか。だれであっても立入禁止だ』

『あなたは、三巨頭とおっしゃいましたね。なぜその3人の方を三巨頭と呼ぶのですか。』



『それは、その3人が全世界をどう治めるか決める人だからだ。』

するとその男は、真剣なまなざしで歩哨の方を見た。その目が明るく輝いた。『だからこそ、私はその3人に会わなければならないのです。私には計画があります。もし彼らが私の計画を取り入れてくれさえしたら、その計画は見事に功を奏し、世界に平和をもたらすはずですよ。』

これを聞いて、兵士は笑い出した。『さあ、さあ、帰るな。お前さんは信任状も何も持ってないだろう。』

『信任状ですか。多分、ここにはありません。』 こう言うと、その男の人は軽く手を上げて会釈をし、帰ろうとした。そのとき歩哨は、その人の手のひらにひどい傷跡があるのを見てとった。そしてもう一方の手を見ると、そこにも傷跡があった。

『お前、戦争に行っていたのか。』 歩哨は少しいねいに尋ねてみた。

『お前さん、両手にすごい傷跡があるじゃないか。』

男は振り返って、答えた。『この傷には気づかないと思っていましたよ。いや、いや、この傷は戦争で受けた傷ではありません。』 これだけ言うと、突然姿を消した。まるで暗やみの中に溶け込んでいったようであった。

歩哨は、その男の後ろ姿をじっと見つめていたが、やがてはっと気がつき、驚いて叫んだ。『俺はあの御方を知っていたはずだ。あの御方を中に入れさせしていたら……。』 これだけ言うと歩哨は驚きと落胆のあまり、へなへたとその場にくずおれてしまった。

この御方こそ、世に住むあらゆる人々に祝福をもたらして下さった御方であり、次のように語られた御方であった。

『汝の手と足にある傷は何ぞや』と。その時、彼らはわれの主なることを知らん。そはわれ彼らに向いて『この傷は、わが友の家にありて得たる傷なり。われは挙げられたる者なり。十字架につけられたるイエスなり。われは、すなわち神の子なり』と云えばなり。

(教義と聖約45:51, 52)

人生が報いと罰の時であることを心に留め、きょうはしばらくの間、その積極的な面について考えてみようと思う。従順であるがゆえに主からもたらされる報いについてである。

「さて、イエスがガリラヤの海へを歩いておられると、ふたりの兄弟、すなわち、ペテロと呼ばれたシモンとそ

の兄弟アンデレとが、海に網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。

イエスは彼らに言われた、『わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。』

すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。(マタイ4:18-20)

さらに、ふたりの兄弟、すなわち、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが主に従った。

こうして、2組の兄弟が、主イエス・キリストの使徒となったのである。

確かに、主の使徒であるということは、人類にもたらされるあらゆる祝福のうち、最大の祝福のひとつである。また同時に、名誉でもある。ちょうど30年前のきょう、1943年10月7日のほぼこの時刻、私はヒーバー・J・グラント大管長の足下にひざまずき、イエス・キリストの使徒に聖任されたのである。

教義と聖約の第76章の啓示は示現と呼ばれ、この中には数々の祝福が約束されている。

「すなわち、かく誠命を守ることによりあらゆる彼らの罪を洗い潔め、聖霊を授くる権能を結び固められ按手聖任せられたる者の按手によりて聖霊を受けんためなり。

而して、これらの者は信仰によりて打ち勝ち、御父が正しく且つ真実なる者に皆注ぎたまう約束の聖き『みたま』によりて結び固めらる。

而して、これらの者は『長子』の教会員にして、

御父はこれらの者の手にすべてのものを与えたまい、

また、彼らは御父の無上完全と御父の栄光とを受けたる祭司にして、また王たるなり。

而して、エノクの神権に等しく、また神の生みたもう独子の神権に等しかりしメルケゼデクの神権に等しきいと高き神の祭司なり。

この故に彼らは誌されたる如く神々にして、すなわちまた神の子なり。

この故に、すべてのものは皆彼らのものなり。生けるも死ぬるも、現在の

ものも、はた未来のものも皆然り。すべては彼らのものにして、彼らはキリストのもの、キリストはまた神のものなり。

この故に彼らはすべてのものに打ち勝たん。(教義と聖約76:52-60)

「神は私たちが完全な者にまで引き上げるために、完璧な計画を立てて下さった。」

「これらの者は神とそのキリストとの御前に、いつまでも限りなく住まわん。

これらの者は、正しき者の復活に出て来らん。

これらの者は、新しき誓約の仲保者にして而も自らの血を流してこの完き贖罪を為し遂げたるイエスによりて完くせられたる義人たちなり。(教義と聖約76:62, 65, 69)

「イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、……おいやしになった。

こうして、ガリラヤ……から、おびただしい群衆がきてイエスに従った。(マタイ4:23, 25)

「イエスはこの群衆を見て、山に登り、……弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。

『このころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。

柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。

義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。

あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。

心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。

平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるで

あろう。

「主が約束されるときには、その約束は必ず成就するのである。」

義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに對し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。

喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。…』(マタイ5:1-12)

イエスの心は、絶えず、数々の祝福で満ち満ちていたように思える。

予言者ジョセフは、次のように記録している。

「またわれらかくの如く日の光栄を見たれども、こはあらゆる点に於て他より勝れたり、すなわち此所に於ては神すなわち御父その御座より永遠に治めたもうなり。

そもそも、父なる神の御座の前にはすべてのもの皆畏れ敬いて頼づき、永遠に御栄を讃め奉る。(教義と聖約76:92, 93)

そしてさらに、

「されど、神の御業は偉大にして驚嘆すべく、われらに示されたるその王国の奥義はその光栄、勢い、支配の及ぶところ、如何なる智を以てもこれを量り知るべからず。(教義と聖約76:114)

「またこれらのことは、人の言葉によりて知らすことを得るものにあらず。こは神を愛し神の前に自らを潔くする人々に神の与えたもう聖き『みたま』の力によりてのみ、ただこれを見これを悟るべきものなればなり。

神はかかる人が独りこれを見、これを知る特権を与えたもう。(教義と聖約76:116, 117)

また、1832年に与えられた示現として知られる啓示は、次のような言葉で始まっている。

「聞け、汝ら諸々の天よ、地よ耳を傾けよ。喜べ、そこに住む者たちよ。主は神にして、主の他に救い主なければなり。

主の智慧は偉大にして、その為したもうところは驚嘆すべく、その御業の終は誰も知る者なし。

その企図は敗ることなく、またその御手を止め得る者絶えてなし。永遠より永遠に主は同じにして、その齢は尽くることなし。

主かくの如く言う。主なるわれはわれを畏るる者に恩恵と憐みとを与え、終りまで義しく且つ真実にわれに仕う

る者に眷を与うるを喜ぶ者なり。

彼らの得る報いは大きく、その栄は永遠なるべし。」(教義と聖約76：1—6)

主は、祝福を与えるときには、必ずそれを実現して下さり、主が約束されるときには、その約束は必ず成就するのである。1831年に、主は次のように言われた。

「主、われ言いたることは、われ言いたるなり。われ言い逃れせず。天地は過ぎ行くとも、わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言われるも、僕らの声にて言われるもみな一つなり。」(教義と聖約1：38)

主のメッセージは、愛と平和であった。

また、主は、御自分が十字架にかけられるに先立って、弟子たちに心の準備をさせ、次のように言われた。

「わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。」(ヨハネ14：12)

「イエスの心は、絶えず、数々の祝福で満ちていたように思える。」

次に、アブラハムの話を思い起こそう。3人の人が、マムレのテレビンの木のかたわらに居るアブラハムのもとを訪ねるくだりである。このときアブラハムは彼らを迎えて、地に身をかがめた。彼らは、「あなたの妻サラはどこにおられますか」と尋ね、次のように言った。

「『あなたの妻サラには男の子が生まれているでしょう』。サラはうしろの方の天幕の入口で聞いていた。

さてアブラハムとサラとは年がすすみ、老人となり、サラは女の月のものが、すでに止まっていた。

それでサラは心の中で笑って言った、『わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみなどありえようか。』



主はアブラハムに言われた、『なぜサラは、わたしは老人であるのに、どうして子を産むことができようかと言って笑ったのか。』

主にとって、不可能なことはありませんか。……サラには男の子が生まれているでしょう。』(創世18:9-14)

誠に、主にとって不可能なことは何ひとつない。主の約束は、必ず成就するのである。

1833年に主は数々の約束を与えられた。私たちはそれをどれひとつとして軽々しく考えてはならない。

主は、「さつりくの天使は……彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし」と言われた。エジプトで捕われていた時代の記録を思い出すとよい。

また、健康を受けるとも言われた。すなわち、頑健な体力が授けられ、その骨に髓を受け、そのへそに健康を受けるのである。

そして、一層偉大とも思える約束が次のように与えられている。「また智慧と知識の大なる宝まことに秘れたる宝を見出さん。」(教義と聖約89:18-21参照)

これら一連の祝福は、これらの言葉をおぼえ、かつ従って歩むすべての人々に与えられるのである。

「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」主は絶えず人々にこのように教えられた。(ヨハネ14:15)

海面で吹き荒れる嵐も深い底には決して届かない。同様に、人生の深みに到達し、そこで静寂のうちに神の御声を聞く人々には、揺るぎない確信があり、この確信により種々の難事の嵐の中を平穩無事に航海できるのである。

美しい約束は数え切れない。聖典をひもとくこと、それ自体にすでに報いがあるように思えるし、主の戒めに従って生活している証拠とも思えるのである。

またそのほかにも、厳粛な約束が主から与えられた。

「(義のうちに生きた者たちは) 瞬く間にその身変り……。」(教義と聖約101:31)

「汝らこれらの言を聞け。見よ、われは世の救い主なるイエス・キリストなり。これらのことを汝らの胸にしかと銘ぜよ。汝らのところに永遠の厳粛なることを銘記すべし。

汝ら謹みて、わが誠命のすべてを守れ。」(教義と聖約43:34, 35)

また、ほかにも祝福が約束されている。

「そは、わが時至らばわれ審判のため地上に來り、その時わが民は贖われわれと共に地上を支配すべければなり。」(教義と聖約43:29)

詩篇にも、次のような祝福が約束されている。

「地と、それに満ちるもの、世界と、そのなかに住む者とは主のものである。

主の山に登るべき者はだれか。その聖所に立つべき者はだれか。

手が清く、心のいさぎよい者……こそ、その人である。このような人は主から祝福を受け、その救の神から義をうける。」(詩篇24:1-5)

そして、私たちのこの神権時代には、次のような大きな報いが約束された。

「すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は、その祝福を与うるために定められたる律法……を……守らざるべからず。」(教義と聖約132:5)

続けて、主は永遠の祝福について述べておられる。戒めを守り、義しく生活している人々について、主は次のように言われた。

「……彼らは彼処に置かれたる諸天使諸神の前を通り過ぎ、各々その頭に結び固められたる如く、各々最高の榮に進むを得てあらゆることに光榮を受くべし。この光榮は最高完全の光榮にして、永久にその子孫の続くことなり。

それより、彼らは神々となるべし。彼らは終りなければなり。……それより、彼らは神々とならん。彼らはすべての権能を有し、諸天使彼らに従えばなり。……

もし汝らこの世に於てわれを受け入れなば、汝らわれを知りて最高の榮に進むを得ん、すなわちわが在るところ

に汝らもまた在らん。」(教義と聖約132:19, 20, 23)

主はイスラエルの子らに次のように語りかけられた。これは、今日の私たちにも約束されたものである。

「わたしはあなたがたを顧み、多くの子を獲させ、あなたがたを増し、あなたがたと結んだ契約を固めるであろう。

あなたがたは古い穀物を食べている間に、また新しいものを獲て、その古いものを捨てるようになるであろう。

わたしは幕屋をあなたがたのうちに建て、心にあなたがたを忌みきらわれないであろう。

わたしはあなたがたのうちに歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となるであろう。」(レビ26:9-12)

また主は、弟子たちのもとを去るとき、次のような約束を与えられた。

「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14:27)

これほど数多くの祝福が与えられているならば、一体ほかに何を求めようと言うのだろうか。ここに述べたすべての祝福と、そのほか諸々の祝福は、進んで戒めに従った生活をし、誠実で徳高い行動をする人々には、皆与えられるのである。

私は、神が私たちに条件つきでこれらの約束と、その他数多くのよいものを与えて下さったことを証する。神は御自分の真実の教会を地上に設立された。この教会こそ、その神の教会である。神は私たちを完全な者にまで引き上げるために、完璧な計画を立てて下さった。また、私たちを導くために予言者を与えて下さった。今日、ハロルド・B・リー大管長がこの王国の指導者であり、この民の指導者である。また、リー大管長は神の予言者である。私はこれを知っている。以上のことをイエス・キリストの御名により、厳粛に証申し上げる。アーメン。

病の祝福



岩下能栄

東京ワード部

1973年3月、私は、BYU在学中に曲がって生きてきた親知らずがもとで舌癌となり、ユタ州プロボにある教会の病院で手術を受けました。癌という病名をひた隠しにする日本の医師とは違い、アメリカの医師は、本人に、あなたは癌です、生きる可能性は何%で、死ぬ率は何%ですとハッキリと教えます。医師がそのことを教えてくれたとき、私の心は想像していた以上に平穩でした。私の心をそのように支えたものは福音です。神様がいらっしゃるということ、私たちの霊は永遠に生きるということを知っていれば、どのような状態に置かれようとも恐ろしいものはないのです。福音があるということは、私たちの想像する以上に偉大な力であり助けです。

医師は私に、手術後少なくとも3、4年は電話で対応するのは無理であろうと語り、私がしゃべる能力がほとんど無くなることを暗に示されました。けれども何よりも私を励まし、希望を持たせたものは、「手術後もあなたは話す能力を与えられるでしょう」というホーム・ティーチャーの祝福の中での言葉でした。そしてこの祝福は、次の様に成就されたのです。手術前夜、七十人最高評議員会会員のS・デルワース・ヤング長老が、私にいやしの儀式をして下さるために病院までいらっしゃいました。彼が私の頭の上に手を置き祝福し始めたとき、つま先から頭のとっぺんまで強いふるえが私の全身を走り、それまでに感じたことのない目に見えない強い力が、私の癌をぐいぐい引張るのを感じました。確かに、この目に見えない強い力は、私の癌を小さくしたのです。翌日の手術では、医師が告げたほど切る必要がなくなっていました。そしてこのことが会話無能力者という運命から私を救ってくれたのでした。

手術後は元気になりましたが、それから8カ月後に病が再発しました。ちょうどその頃、私は原因不明の耳痛と発熱で寝ており、BYUのファミリーファザーが、いやしの祝福をしに来て下さいました。その祝福の中で、私は何回も「神様

はとてもあなたを愛していらっしゃいます」と言われ、「愛していらっしゃるからこそ、この様にあなたに試練を与えるのです。絶えず祈りなさい」と言われました。そしてこの祝福を受けたとき、私は、それがただの病気ではないことを悟りました。それと同時に、ずいぶん前から知っていたつもりでしたが、「試練」という言葉をあらためて心に強く感じました。信仰の道とは何と厳しいものでしょうか。それから3、4日して、私は医師から、癌が再発したことを知らされました。私はすぐに帰国しました。帰国する前夜、かつてカリフォルニアで私のインスティテュートの先生であり、当時BYUで私の宗教のクラスの先生をしていたクラーク・ジョンソン兄弟が、私に祝福をしてあげたいとアパートに訪ねていらっしゃいました。その祝福の中で、「あなたを通して、あなたの両親の生活の中にイエス・キリストの教えが深くしみ込んで行くでしょう」と言われました。この祝福の言葉は、私の両親がそれから1カ月後にバプテスマを受けるまで、具体的にどんなものか、私には想像もつきませんでした。なぜなら、私は両親の強い反対にあい、なかなかバプテスマを受けられなかったからです。両親は、教会に対してあまり良い態度は取っておりませんでしたので、両親の改宗は奇跡に近いような状態でした。けれども私は、毎朝夕、両親が教会員になりますようにと祈り続けていました。病院に私を祝福しに今井監督と岩永監督がいらした後、聖霊に満たされた父と私は、その祝福の言葉について話し合いました。その会話は、私が生まれてから今までに父と持った会話の中で一番すばらしいものでした。翌日父は自分でしたためた一通の手紙を持って病院までやって来ました。教会員になるという強い決心をたくした父の手紙を、私は涙を流して読みました。そしてその日の夜から、それをそっと枕と枕カバーの間にはさんで寝ました。神様のみ業は奇しきみ業です。神様の御計画は、私たち人間のおしるることのできないものです。姉もモルモンですので、私の家族はこれで全員モルモンの家族になりました。このことを何よりも祝福と感謝しております。

今井監督は、「あなたの両親の愛と信仰により奇跡が起こることを約束する」と祝福の中でおっしゃいました。そして私の両親は、確かに奇跡が起こるほどの強い愛と信仰を示してくれました。そのとき、患部には潰瘍ができていました。放射線治療中に潰瘍ができるということは、普通でしたら命取りになります。放射線をかければ潰瘍は直りにくくなりますし、潰瘍それ自体も放射線の効果を妨げるからです。それがあつた日、一日にして潰瘍がいやされたのです。いやされたところは、まるで生まれたての赤ん坊の肌の様にきれいに更新されていました。

「神は、いかなる患難の中にいる時でも私達を慰めて下さ

り、また、わたくしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。」(Ⅱコリント1:4)この聖句は入院中の私の心の中に、いつも響いていました。常に神様は私と共にいっしょに慰めて下さいました。また兄弟姉妹たちの祈りと愛に心から感謝しております。神によって生かされている人生をいたずらに過ごすことなく、少しでも神様のみ業の助けとなるよう、自らの霊の成長に励みたいと思っております。

娘に学ぶ

岩下兄弟姉妹

岩下好治
東京ワード部

1973年11月18日夜10時20分羽田着の飛行機で舌癌再発のためアメリカから娘が帰ってきました。早速20日の朝慶応病院に入院しましたが病気は手遅れの様子でした。病院でもいろいろ手を施してくれましたが病気は悪化するばかりで娘は耳の痛みを訴え、痛み止めの薬を飲むだけでした。再発でもあるし、少々手遅れでもあり、快癒の見込みは無いだろうというのが御医者さん方の考えの様子でした。

しかし私には絶対になおるといふ信念がありました。それは神様は実在されており、真心込めて御祈りすれば願いはかなえられると信じていたからです。そして私は祈りました。「神様、私は私の命を捧げます。どうぞ神様の恩し召しの通り私を御使い下さい。そして娘に特別の祝福を御与え下さい。どうぞ奇跡を御与え下さい」と一心に祈りました。そして重態の娘を喜ばせ、病気と戦う勇気を湧き立たせてやる方法は何だろうか。あるいは最後の贈り物となるかも知れない娘への言葉は何だろうか。それは私たちの改宗に違いないと思いました。そして妻と相談して私たちは改宗することにしました。何年も私たちの改宗を心願して来た娘は本当に喜びました。そしてこれがひとつのきっかけとして少しでも娘の病気が好転してくれるように祈りました。私は本当に心から祈りました。奇跡はあらわれました。全く不思議な位にあら

われました。そのときをピークにして娘の病は急激に快方に向かいました。

能栄が日一日と快方に向かい、病院へ通うのが明るい希望で一杯になっている頃、私たちはバプテスマを受けることができました。12月21日でした。娘は喜びのあまり自分も出席する心算でいましたが、その日は熱が出て出席することはできませんでした。けれども名古屋から出て来て妹の看病をしていていた姉娘が出席してくれ、この年老いたふたりの兄弟姉妹は、東京ワード部の皆様が暖く見守る中で無事バプテスマの儀式を済ませることができました。私たちは早速皆さんの前で証をさせられました。自分の喜びや感激ばかりでなく、娘の喜びが胸に迫り、涙が出て話は途絶えがちでした。

私はプロボで娘がデルワース・ヤング長老のいやしの儀式を受けたときも、このたび病院に来て、今井、岩永両監督が娘のために灌油の儀式をして下さったときも、感謝と感激の涙が止まりませんでした。そのとき今井監督が、あなたがモルモンの会員でないことは残念ですが、と言われて、家族として特に私に娘の頭の上に手を置くことを許して下さいました。実はプロボでの癒しの儀式のときもデルワース・ヤング長老は私が会員になることが娘の病を癒すためにはどうしても必要なのだと言われたのだそうです。そう言ってから娘は私に向かい、「神様はあなたを必要としているのです」と言いました。

私はこんな年寄りの私を必要だなんて、どうして神様がおっしゃるのだろう。こんな私にそんな必要があるのだろうか。私の娘を癌にしてまで、私にそのことを教えているのだろうか。そして再発という一層重態の形をとってまでも私にそれをお示しになっているのだろうか。そんなふうを考えておりました。そして遂に、もしもそのための道具として娘が使われているのだとすれば、私のような者でも何かお役に立つことがあるのかもしれない。せつかく道具となって苦しんでくれた娘のためにも改宗して、一時も早く病気をなおしてやらなければならないと決心したのです。そのようにして神様の国への門は開かれました。

私たちはバプテスマを受け、過去の一切の罪、汚れを許され、その心は洗い清められ、今天国へ昇る階段の前に案内されました。私たちを優しくここまで導いてくれたのは長老たちでした。これからは自分自身の力でこの階段を一段一段昇って行かなければなりません。

娘は東京ワード部の皆様やプロボのお友だちの絶え間ない祈りや断食によって神様の大きい祝福を受け、3月5日退院することができました。ただただ感謝にたえません。3ヶ月前のことを思うと全く夢の様な気がいたします。信じて祈ることはすばらしいことです。そしてそれが実現されたとき

